

史的唯物論の  
觀念論的歪曲

次に唯物史觀の史的觀念論の立場からの歪曲を見るならば、何といつても一番影響したのは新カント主義である、新カント主義者の側からの唯物史觀批判についてはすでに觸れたから、ここでは、マルクス主義者（と自稱する者）自身による史的唯物論のカント主義化を見て置く必要がある。この方面で代表的なのは、去年の二月事件で實際的にも完全に破綻を示したといはれる「左翼」社會民主主義又はオーストリー・マルクス主義の理論的指導者マックス・アドラーとオットー・バウワーである。

M・アドラーによれば、カントにおいて認識や行爲規範の普遍妥當性の根據であつた意識一般、先驗的意識なるものは、實は超個人的な、社會的な内容を持つもので、マルクスの發見した「社會化する人間」の意識である。彼においてはカントの先天的とか先驗的とかいふ用語は社會的といふ意味に解釋され、カントの批判哲學の課題は「意識の社會的性質」の究明、人間の「社會化する意識」の研究であつたとされる。社會的といふことは「個人的經驗に對して先驗的」だといふことであるから、「人間は社會において生活するが故に社會的なのでなく、すでに直接にその自意識において社會的であるが故に社會において生活し得る」のだと見做され、「人間は一切の歴史的・經濟的社會化以前にすでにその精神的存在において、その理論的意識において社會的である」と規定される（「思想家としてのマルクス」）。つまりM・アドラーは豫め「マルクス主義は社會生活並びに社會的發展の科學である」と定義し、それが唯物論哲學に立脚する學說であることを否定し、そしてカント哲學に社會學的着色を施し、それを眞實のマルクス主義なりとするのである。

このやうな觀念論的見地から彼は、經濟的なものが上層建築を規定するといふ命題における經濟的なものは決して



「物質的」なものではないとか、經濟的關係、生産力、社會の經濟的構造等といふ「これらすべての概念は、マルクス主義の意味では社會的、概念的であつて、單なる自然概念ではないが故に、全然精神的性質のものである」<sup>1)</sup>と云ひ、「經濟とイデオロギーとは全然異つた二つのものではない。むしろ、同一の精神的關係の二つの異つた段階である」と斷定して（「カントとマルクス主義」）、全くの史的觀念論を展開し、社會過程は因果性の觀點の代りに合目的性の觀點から考察さるべきであると述べ、「社會化する人間」の意識の普遍妥當的な永遠的な機能として認識および意欲の機能と並んで信仰のそれを擧げ、歴史的進歩の保證は神の中にある等々といふ神學的言辭をならべる。彼が *Klassenka* *mpt* を認めるのは、それが本質的には「社會化する人間の意識」の發展の形式であり、「より高き理性および道德の要請」であり、「文化闘争」、「精神運動」であるからである。

オットー・パウワは民族問題に關して第二インタナショナルの權威とされてゐるが、彼の民族理論にもカント的影響が著しいことは、彼の「民族的統覺」の概念において示される。これはカントのいはゆる「先驗的統覺」（先驗的意識における最高機能）にやはり社會學的、といふよりもむしろ民族的衣裝をまとはせたもので、O.パウワによれば一つの民族が民族として特徴づけられるのは正にそれに固有な「民族的統覺」があるからであり、従つて民族は「運命共同體から生長せる性格共同體」（註）であるといふやうな定義が與へられる。各民族にその民族的特質を賦與する「民族的統覺」は先驗的なものであるから、民族は形而上學的範疇となる。一つの民族が他民族の文化を攝取するとき、それは該民族の「民族的統覺」によつて獨自な加工を受けるが故に、諸民族間における文化の交換は決して「民族的性格」を平等ならしめない。「民族的統覺のこの一大事實のために、一つの民族が他民族から取つて來る



如何なる思想も、それが加工され、全民族的存在に適應せしめられることなしには攝取されないであらう」と彼は主張する（「民族問題と社會民主主義」）。彼は將來社會において民族自決の原理が實現される曉には、民族分化は益々發展するだらうと考へて、マルクス主義における民族自決の政策は諸民族の國際的融合への辯證法的行路であるといふことを理解しない。

（註）嘗てO・パウワの將來社會における民族分化の一層の發展といふ觀念に一應反對したカウツキーが、今日「吾々の相異は一見してさう見える程大きくはない」と云つてゐるのは興味深い（「唯物史觀」）。

O・パウワの民族理論はその「統覺」説によつてファッシズムの人種論的な民族理論に類縁するものである。

唯物史觀のカント主義化に關するこれらすべての試みは、明かにベルンシュタイン、L・ヴォルトマン、マールブルグ學派のK・フォレンダー等の見解と近い關係にある。それは現在ソヴェート哲學およびソヴェート聯邦そのものに對する「十字軍」の道具として役立つされてゐる。

これに關聯してなほ、自然主義の上に更にマッハ主義やカント主義の要素を、特に認識論において採用してゐるカウツキーが（註）、唯物史觀の領域においても屢々觀念論に轉落してゐることを指示する必要がある。カウツキーによれば物質的生産力は「大部分精神的な性質のもの」（Zum grossen Teil geistiger Art）であり、それ故に生産關係は「強く精神をもつて貫かれてゐる」「精神的關係」である。彼は人間々の社會的關係を「精神的關係」と同じ意味に取り、「マルクス經濟學が人間相互間の社會的、精神的關係を媒介する物の背後にこれらの關係そのものを洞見し、商品の『物神的性質』を暴露したことは、その偉業に屬する」と主張して、マルクスが人間の意志から獨立な生産關



係を發見したのだといふことを修正し、社會發展に關してはやはり同じ觀念論的見地から、その原因を知識や科學の發展に求める。「かくて『物質的生産力』の發展は根本においては單に自然に關する知識の發展に對する別名にすぎない。従つて人間的イデオロギーの『現實的基礎』、『下部構造』の最深の基礎として精神的過程が、自然認識の過程があらはれる」と彼は書いてゐる（『唯物史觀』）。

（註） 彼は例へば物自體の不可知に關するカントの學說に讓歩して「吾々は孤立せる沒關係的な物自體を認識することは出來ないにしても、その差別、聯關およびその運動と變化を認識することは出來る」と云ひ、吾々は物と物の關係を認識し得るのみで、この關係から切離された物自體は不可知であるといふ思想を述べ、また認識は「物への思想の適應」と「思想相互間の適應」において成立するといふマツハの見解（ここには勿論模寫論はない）の受賣りのために全一章を捧げてゐる（『唯物史觀』）。

ソヴェート聯邦においては、ルービンが經濟學の對象としての生産關係を生産力から形而上學的に切離し、それを結局において「意志關係」（カウツキー的に云へば「精神的關係」）とする觀念論に陥つたことはすでに充分知られてゐる。それはソヴェートの條件の下で現はれたメンシエヴィキ的理論であつた。ところでメンシエヴィキ的色彩を帯びた觀念論者と云はれるデボーリン主義者は、理論の實踐からの分離、哲學の現實からの游離を特色とし、従つて史的唯物論の如き社會的現實に密接した領域に對して無關心であつたことが、彼等の活動の特徴の一つでさへあつた。史的唯物論の研鑽に對するこのやうな無關心の故に、彼等が偶々この方面に進出するときは、多くの本質的な缺陷を露出した。例へばカーレフは（論文「科學の對象としての史的唯物論」）史的唯物論は一般的なものではなくて「歴史的



に特殊なもの」を對象とするといふカウツキー流の經驗論的見解を、具體的研究の抽象的な「前提の體系」に關する彼の形式主義的、觀念論的見解と折衷せしめて支持し、政治的にはトロツキー主義的誤謬に陥り（ソ聯邦における農民に對する評價において）、ツイミヤンスキーは、史的唯物論は具體的なものから切離された「社會一般」に關する「論理的」分析から始むべきであると主張した。彼は云つた、「しかし乍ら、一定の具體的な社會現象に關する問題を解決するに先立つて、吾々は個々の現象の具體性を捨象し、社會一般、抽象において取り上げられた社會、の合法性を考察しなければならぬ。實際、社會過程を論理的に認識することは、その一般的聯關を認識することを意味する。處でこのことは、何よりまづ抽象的社會の合法性を認識し、しかる後に、それから出發して具體的な社會構成の認識に到達することを意味する」（辯證法的唯物論「改造社版六一三頁」）。このやうな觀念論的立場から彼は「一つの社會構成の他のそれへの推移は運動の運動である」といふやうな空虚な一般的フレーゼを振りまはした（同書第一版）。これらはすべて、一般的なもの個別的なものとの分離、辯證法のヘーゲルの觀念論的理解を示すものである。

客觀主義と 主觀主義
---------------

唯物史觀に對するブルジョア社會學說の影響は、自然主義的影響でも、觀念論的影響でも、現在では主として、客觀主義の方向におけるものが特に吾々を關心させる。そこで、その二、三の主要な場合を舉げて見る。

吾々は先きにストルーヴェの抽象的客觀主義がカント主義と關聯してゐることを見た。カントは「實踐理性」の優位を唱へ、多くの觀念論者と同様に倫理的範疇として理解された實踐の意義を強調するといへ、その「實踐理性」は「理論理性」から形而上學的に分離され、彼においては認識の形成に當つての實踐の役割は理解されなかつた。新



カント主義においても理論と實踐のこの二元論的分離は繼承される。そしてそれは經驗的なものと先天的なものとのカント的分離と相俟つて、社會生活、現實的利害、總じて一切の經驗的なものから游離せるエーテル的な先驗的意識なるものを認識主觀として想定せしめる（リッカードの「認識の對象」における認識主觀の理論を想起せよ）。これは認識の眞理性はすべて、の利害關係や黨派的精神を排除し超越することによつて獲得されるといふブルジョア的自由主義的見解を論理的に徹底させたもので、かかる認識論の下では學者は社會的關係から超然たることを要請され、理論は實踐から分離せしめられ、このことは逆に理論の内容に影響して社會過程を種々の人間グループ、諸々の階級の利害關係や活動の見地から考察せしめる代りに、それを抽象的・客觀主義的に觀察せしめることとなる。認識過程におけるプラクシスの意義を理解せず、「傾向性」と科學性の辯證法的統一を理解しない者は、當然にこのやうな抽象的客觀主義の傾向をとる。

この意味で例へばデボーリン主義が客觀主義的であることは勿論である。何故ならそれは認識論におけるプラクシスの意義を過小評價し、理論をそれから分離せしめたからである。所で「傾向性」と科學性の深刻な辯證法的統一の理解はマルクス、エンゲルス以後「ナロードニチュエ」の經濟學的内容において初めて明確に展開されたものであつて、カウツキーは勿論、プレハーノフにおいてさへもそれは缺けてゐた。「資本論」の著者が、彼の天才、彼の達識、彼の眞理愛好心と結合するに、一切の階級鬭争と階級對立の上に超然としてゐる美しい特性を以てし、しかも經濟的現實との密接な接觸を棄て去ることをしなかつたならば、「資本論」がさらに一層囚はれない、そして科學的なものになつたらうといふことについては、全然疑ひのないところである。「もしもベルンシュタインが、社會研



究と社會鬭争との一致を以て、自然研究に反して經濟學の負うてゐる不利益の一つだと云はうとしたならば、彼の言に賛成しなければならぬ」(「マルキシズム修正の駁論」、春秋社版「世界大思想全集」第四七卷四七、四八頁)——これがカウツキーの「最良の時代」における言葉である。哲學においてはカウツキー等よりも比較にならぬ程優れており、根本において辯證法的唯物論者であつたプレハーノフさへも、彼の最も「輝ける頁」を成してゐるところのベルンシュタイン批判において(論文「カントに對する Crit」)「嚴密にいへば『黨派的科學』は不可能である」と言つてゐる。

これらすべては、理論上では、理論の形成におけるプラクシスの役割の無視又は過小評價に結びついてゐるものであるが、これよりもつと注目すべきものは、社會過程そのものにおける人間のプラクシスの役割を過小評價する客觀主義的見解である。これは自然主義と淺からぬ縁を持つており、史的唯物論の正しい展開および適用のためには現在特にエネルギーッシュに批判さるべき性質のものである。

この種の客觀主義は、社會發展の根底を生産力、經濟の自生的運動に求め、生産關係の相對的積極性を理解せず、従つて生産關係の項とも云ふべき人間の積極的活動、より正確にいへば先進的クラッセの意識性や組織性や行動の役割を過小視又は無視する點に表現される。舊ロシアにおける經濟主義、メンシエヴィズムがこの見地に立ち、ドイツにおいてはローザ・ルクセムブルグさへもかかる史的客觀主義から離脱出来なかつたと云はれてゐる。この種の理論がロシアにおける生産力の發展水準の低さを援用して「十月」に反對したスハーノフ等においてその明白な社會的意義を示したことは周知である。

カウツキーは「一つの社會構成は、そこで發展する餘地あるすべての生産力が發展してゐない間は、没落するもの



ではない」といふマルクスの「經濟學批判」の序文中の有名なテーゼは、資本主義的社會構成の發生に至るまでの歴史に妥當するものであつて、現代資本主義に對しては妥當しない、と主張し、その理由を次のやうに説明してゐる。即ち、彼によれば、生産關係が生産力の發展の桎梏になるといふことは、*Ausbeutung*の斷えざる反覆によつて「生産力の頽廢」を來たすといふことであつて、奴隸所有者や封建領主の支配はかかる結果に導いたのだが、資本主義はこれと異つて單に絶對的餘剩價值のみでなく、また相對的餘剩價值をも生産せしめることによつて生産力を限りなく發展させることが出来る。「だからこの展開(資本主義的生產力の發展——筆者)を必然的に停止せしめる經濟上の反對傾向 (*ökonomische Gegentendenzen*) が資本主義そのものから生長してくるのを期待すべきでないことを吾々は知つた」とカウツキーは書く。ここでは恰かも、マルクスが、生産力と生産關係のコンフリクトの結果としての新しい構成の發生をもつて、單に生産力の自生的運動を「停止」又は「阻止」する「經濟上の反對傾向」の自然的生長の結果にすぎないと見做したかのやうに、マルクスの命題は客觀主義的に曲解されてゐる。唯物史觀のかかる客觀主義的解釋に基いて、資本主義は「經濟上の反對傾向」の缺如の故にいくらでも新狀勢に「適應」して發展し得るのだから、「今日私には、純經濟的に考察すれば、資本主義は半世紀前よりも遙かに生活力あるものに見える」(これは一九二九年に語られた言葉だ)と主張するカウツキーは、資本獨占が生産力の桎梏となつてゐることを現在でも認め得ないと斷言し、それ故に「資本獨占は、それと共に、且つその下で繁榮してゐる生産力の桎梏となる」云々以下 *Die Expropriateure werden expropriert* なる辭句をもつて終る「資本論」第一卷(第二十四章)において表白されたマルクスの見解に「吾々はもはや全く従ふことは出来ぬ」と言明する。そこで彼の結論はかうである。「吾々もまたそれ



(Expropriation der Expropriateure——筆者) を期待する。しかし吾々は……生産力と資本主義的所有とのコンフリクトに資本主義の Ende を期待しはしない。吾々はこの Ende を『資本獨占が生産様式の桎梏』となつたときに初めて期待するのではない。吾々はこの Ende はもつと早くに到達されると確信すべきあらゆる理由を持つてゐると信じる」(「唯物史觀」)。

この結論が史的唯物論の放棄以外の何ものでもないことは誰の目にも明瞭であるが、かかる放棄の根底には實に史的唯物論を経済的唯物論なりとするその客觀主義的歪曲が横はつてゐることもこれ亦明瞭である。

元來カウツキーにおいては環境への「適應」といふ生物學的範疇の社會への機械的移入の中にすでに客觀主義の基礎が置かれてゐたのである。

地理的唯物論への偏向を持つたブレハーノフに客觀主義的偏向のあることも亦偶然ではない。ブレハーノフの「マルクス主義の根本問題」における有名な公式は――

- (1) 生産力の状態
- (2) それによつて制約された経済的關係
- (3) 與へられた経済的「基礎」の上に生じた社會的、政治的、制度
- (4) 一部は直接に經濟により、一部はその上に生じた社會的、政治的、制度によつて規定される、社會的、人間の、心理
- (5) この心理の諸特性を反映する種々のイデオロギイ

となつてゐる。この公式においては、――上層建築の相對的な積極性が定式づけられてゐないことについては言はな



いとしても、——社會過程の諸要素は謂はば同時存在の相において、靜學的に示されてゐて、その動態において、生とした發展の觀點から、發展を擔ふ人間（従つてクラッセ）のプラクシスの觀點から把握されてゐない。この公式は一見「經濟學批判」序文の命題の壓縮的表現であるかに見えるけれども、實際にはかの序文で云はれてゐる *Klassenkampf* の契機、人間の積極的活動はここでは見落されてゐる。このことは彼が一般理論的問題の處理に當つてプラクシスの立場を離れたといふ事實（理論の實踐からの分離）から理解されるだらう。それにブレハーフにあつては生産力において、又はそれにとつて、地理的環境の役割が第一に重要なものであるとすれば、彼の客觀主義的偏向はもはや説明をまたずして明かである。

ついでに、「生産關係は労働手段によつて規定されると云はなければならぬ」といふ大森氏（「唯物史觀」一八二頁）の見解における客觀主義を擧げて置かう。この命題は物が人間々の關係を規定する（何故ならば労働手段は物であるから）といふ見解を表現してゐる。史的唯物論がこれ程までに粗朴な仕方で理解された例を、吾々は未だ嘗つて知らない。

唯物史觀の客觀主義的修正が現在非常に吾々の關心を引く現象だといふことは、未だ決して主觀主義的偏向がないといふことを意味しない。カント的な理論と實踐の二元論を採らないあらゆる種類の主觀的觀念論は何らかの仕方で主觀主義的、主意論的であり、従つて現代において流行のマッハ主義、新ヘーゲル主義、生哲學、存在論等のフッサシヨ哲學がいづれも主觀的觀念論の要素を含有してゐる限り、これらの哲學の側からの唯物史觀に對する影響は主觀主義の形態であらはれる。



倫理的社會主義や主觀的社會學のやうに公然と主觀主義の立場から唯物史觀に對立し、それを批判する代りに、主觀主義的學說を史的唯物論にすり替え、前者に後者のレッテルを貼つた人達には、「社會的存在と社會的意識は正確な語義においては同一である」と言明したマツハ主義者ボグダーノフや、主觀的觀念論を政治的方法論とするトロツキーがある。トロツキーは還元論の如き機械論の信奉者であると共に、優れて主觀主義的——特に歴史の方面で——であることを以つて特徴とする（主意說、「論理的飛躍」、アヴァンチュリズム、過程の分析における抽象的圖式主義等々）。その見解における主要なものは、資本主義の不均等的發展の法則の否定の見地よりするソヴェート聯邦の運命に對する否定的評價、農民の基本的大衆をコルホズ化する可能性の否定、組織問題上の分派主義等であり、それらは多く歴史過程の抽象的、圖式主義的把握に基いており、これらの見解の下で客觀主義に陥るまいとする所から、必然的に彼の主意說の如きものが歸結される。

唯物辯證法の本質は「歴史過程における主觀と客觀の辯證法的關係」であつて、「この規定なしには辯證法的方法は……方法たることをやめる」と云ひ、「歴史的社會的現實への方法のこの局限は極めて重要である。辯證法のエンゲルスの叙述から生ずる誤解は、本質上、エンゲルスが——ヘーゲルの誤れる例に従つて——辯證法的方法を自然の認識の上にも擴張してゐることに依據する」と斷言する「歴史と階級意識」の著者ルカッチも亦主觀主義者である。彼のかやうな主張の下では、辯證法は全く觀念論的辯證法となり、歴史における「主觀と客觀の交互作用」からはその唯物論的土臺——自然——が取除かれ、史的唯物論は全くの史的觀念論に取つて代はられる（註）。

（註） 福本和夫氏の辯證法に關する理解には嘗つてのルカッチのかかる見解が強く影響した。唯物辯證法をヘーゲルの觀念論的



辯證法とすり替えてゐる「マルクス主義者」には尙ジークフリード・マルクヤドイツのトロツキー主義者コルシユがある。

數年前に唯物史觀の支持者としてあらはれた三木清氏にあつても、この支持は正に主觀主義の立場からであつた。三木氏によれば歴史的、社會的に規定された「人間の存在の交渉の仕方」によつて構造づけられる人間の「基礎經驗」(そしてこれが本來「存在」に外ならない)が「種々な意識形態の根柢となつて、それを規定する」のであるから、例へば宗教的な「交渉の仕方」からは「宗教的基礎經驗」が生じ、それが觀念論の根柢となり、これに反し「無産者的」な「交渉の仕方」(労働)からは「無産者的基礎經驗」が構成され、それを基礎として唯物史觀が発生する。このやうに三木氏は存在論的、人間學の見地から唯物史觀を「無産者的」な、又は「現代の意識」として規定して、それを支持したのであつた(「唯物史觀と現代の意識」)。しかしこのやうに主觀主義的に基礎づけられた唯物史觀は實は唯心史觀に外ならず、それはだから社會過程の具體的分析には全然無力であつた。

唯物史觀と主觀主義のこの種のすり替えは、唯物史觀は實踐的である、又はあらねばならぬ、と考へて、それにおけるプラクシスの契機を一面的に誇張することに理論的根據を持つてゐる。ところでこのやうなすり替え、偽造をやる人達が、觀念論哲學を借りてくるのは、唯物論を客觀主義と取り違へることに關係があることは明白である。この意味で、主觀主義の側からの批判のみならずまたすり替えに答へるためには、客觀主義を克服し、唯物論に基く史觀、眞の語義における唯物史觀が決して客觀主義でなく、人間の能動性を排除せず、運命論でないことをも解明しなければならぬ。自然主義的および觀念論的社會學、並びにその史的唯物論への影響に對する批判は、プラクシスに接觸する方面から、史的客觀主義および幾分はそれによつて培養もされる主觀主義に對する批判の見地から、遂行



さるべきものである。

主觀主義はファッション的行動性の哲學であり、労働者運動の内部においては都市小ブルジョアのラヂカリズム、極左的偏向の理論として役立ち、客觀主義は國際労働者運動の現段階において主要危険性としてあらはれる右翼的オポチュニズムの社會理論であると見做されてゐるものである。



## 第七章 社會經濟的構成

### 第一節 社會發展の基礎としての労働の役割

自然と  
社會

吾々はすでに史的唯物論において社會經濟的構成（又は經濟的社會構成、社會の經濟的構造）の概念が如何に重要なものであるかを明かにした。この概念の助けによつて社會は、それを自然的、生物學的なものと同置したり、或はそれを自然とは全く切離された精神的なものとして理解する誤つた見解に捉はれないで、正しい見地から把握される。それによつてまた「社會一般」に關する空虚な議論やスコラの辯論は取除かれる。社會はその經濟的構成の見地から考察されて初めて、自然との同一性と差別の辯證法的統一において把握されるものである。

社會が自然との同一性と差別の辯證法的統一にあるといふことは、具體的にいへば、社會は自然史の産物、自然の發展の結果であり、その限り自然の一部であると同時に、殘餘の自然に對して質的に新たなる或るものであり、一つの特殊な質的規定性を具有する、といふことである。この故に社會は自然主義的立場からも、觀念論の見地からも決して正しくは認識され得ないのである。

人間は社會的動物であり、社會の歴史は人類の存在と共に古い。併しながら人間社會が昆蟲の「社會」や野獸の群



から質的に區別されるものとして出現するためには、人間は單なる自然的存在物から本來の社會的存在物にまで進化するしなければならなかつた。

ダーウィンによつて確立された進化論は、一切の複雑な有機體が極く單純な構造の原生々物から進化し、人類はゴリラ、オラングウータン、チムパンデー、ギボンの如き類人猿に近い祖先から發達したといふことを明かにした。種は不變的に固定せるものでなく、自然そのものと同様に變化し、發展するものである。あらゆる動植物はその生存競争において自然淘汰され、その結果、環境に最もよく適應した性質を有するものが存続するから、環境の變化は動物の新しい種の發生を制約する。だが、新しい種の發生のためには、舊い種の若干の個體の中に、新しい環境への適應において新しい種の形成の方向に發展するやうな素質が具備されてゐることが必要である。例へば高等動物の肺は魚類の浮囊から、——その壁にある血管が瓦斯代謝に適應するに至つて——轉化したものであるが、元來魚の水中における沈下および浮揚のための器官であつた浮囊の機能がかやうに變化したことは、遠い地質時代において地殼の變動のために海洋の或る部分が著しく淺くなつて、遂に雨のない季節には水が乾上つてしまふ沼澤のやうなものが方々に出來、そしてさういふ所に住んでゐた魚類の或るものの浮囊が空氣呼吸に適應し始め、他面ではかやうな適應能力のない無数の魚が死滅した、といふことを物語つてゐる。魚類から兩棲類への移行段階を示す肺魚類の存在はこのことの立派な證明である。

そこで話を人間に返すならば、人間が猿に似た祖先から人間に發展するに當つて、第一の決定的な役割を演じたものはエンゲルスによれば直立歩行である。ところで人間の祖先が直立歩行をもつて正規の歩行様式とするに至つたこ



とは、彼が熱帯又は亞熱帯の密林から平地に出たといふ事情、即ち生活環境が變化したといふ事情と不可分な關係にある。人間の動物的な、類人猿的な祖先がかやうに専ら後足で立つて歩行すると共に、手は歩行運動の器官たることをやめて他の生活々動に向けられ、次第に複雑な仕事に適應せしめられ、そして手の發達と相關的に全有機體が發達し、また手の發達による労働の發達は、協力や、相互扶助の必要を呼び起し、このことは言語の發生、發展の刺衝として役立つた。手、の、勞、働、お、よ、び、そ、れ、に、次、い、で、言、語、——この二つのものが、人間の感覺能力や知能の著しい發達を促進した最重要な要因であり、これになほ肉食が社會發展の重要な刺衝として擧げられる。エンゲルスは論文「猿の人間への進化における労働の役割」において、肉食が進化途上の人間の腦の營養と發達に貢献し、火、の、使、用、と、動、物、の、飼、養、を促したといふことを指示してゐる。

このやうに人間は動物界から抜け出してきた。そこで、動物發達史上における人間の地位を一目瞭然たらしめるために、地質時代における動物の發生史の表をかかげる。

(1) 無生代 (Azoic Era)——この時代の地層中には生物の遺物は存在しない。

(2) 初生代 (Archeozoic Era)——この時代の地層中には化石は發見されてゐないが、動植物の遺骸から形成されたと見做される黒鉛と大理石が發見された。

(3) 古生代 (Paleozoic Era)

(a) カムブリア紀——海中の無脊椎動物、三葉蟲と海藻

(b) シルリア紀——軟骨の脊椎を有する魚類と羊齒類

第一節 社會發展の基礎としての労働の役割



(c) デボン紀——肺魚、兩棲類

(d) 石炭紀——爬蟲類の出現、巨大な羊齒類の繁茂、針葉樹の原型の出現

(e) 二疊紀——爬蟲類と兩棲類の角逐

(4) 中生代 (Mesozoic Era)——巨大なる兩棲類の死滅、爬蟲類の繁榮期、爬蟲類から始祖鳥および最初の哺乳類の出現(中生代は三疊紀、ジュラ紀、白堊紀に細分される)

(5) 新生代 (Cainozoic Era)

(a) 第三紀——哺乳動物の繁榮、巨獸の支配

(b) 第四紀——その前半期において現在の動植物相が形成された。ジャバで発見された人間の最古の祖先ピテカントロ

プス(猿人)の骨片は第三紀の終りに屬するものといはれるが、人類の繁榮は勿論第四期のことである。

以上の地質時代は各々數千萬年(但し新生代は五百萬年位)をもつて算へられるのだから、人間の發生は實に永い生物發達史の所産であるといふことが分る。

だが、人間は動物界の一部を成すと云つても、他の動物と同じ意味の單なる自然的存在物ではない。人間は動物のやうに自然の盲目的力に左右され、それによつて一方的に淘汰されるのではなく、部分的にはあるが、自然を支配し、自然的環境を自己の目的に役立つやうに變化せしめる力を持つまでに發達した。人間は動物の如く自然的器官をもつて自然に適應するのではなく、**勞働**において、**人工的器官**をもつて自然を征服し、それを自己に奉仕せしめるのである。従つて人間に關してはもはや生物學的適應をもつて片付けることは誤謬であり、人間の生活關係、即ち社會上



の諸關係、社會は、動物の群の如く自然に對する受動的適應を意味せず、独自の合法則性を有する質的に新たななるものである。

勞 働
--------

人間を動物から區別するところの優れた知能とか、節のある言語とかいふものはすべて労働からの派生物であり、それ故労働こそは正に人間、人間社會を動物界から區別する根本特徴であるといふことは既に明かとなつた。人間社會の歴史的發展の基礎を成すものは労働である。労働は自然と共に富の源泉であるばかりでなく、「それは全人類生活の第一の根本的條件である、しかも或る意味において、労働は人間そのものをさへ創り出した、と言はねばならぬ程に根本的なものである」と、エンゲルスは云つた(註)。人間の器用な手、節のある言語、繊細な感覺器官、思惟能力、人間社會の物質的および精神的の一切の文化——これらすべては労働の産物である。人間生活、人間社會の歴史の根柢に労働が横はり、労働が「人間生活の永久的自然條件」(マルクス)であるといふことは、人間は「歴史を作り」得るためには生きてゆくことが必要であるが、生きてゆくには何よりも先づ衣食住が必要であるといふ事實から歸結される。何故なら労働は、生活資料の生産、従つてそれを通して物質的生活そのものの生産、一口にいへば物質的生産を意味するものに外ならぬからである。

(註)「猿の人間への進化における労働の役割」(「自然辯證法」岩波文庫版上巻所載)

「労働は先づ人間と自然との間の過程、その中で人間が彼自身の行爲によつて自然との物質代謝を媒介し、規制し、統制するところの過程である。彼は一つの自然力として自然の質料そのものに對立する。彼は自然の質料をば彼自身の生活のために利用しうる形態において占有せんがために、彼の肉體に屬する自然力たる腕や脚、頭や手を運動させ



る。彼はこの運動によつて彼の外なる自然に働きかけることによつて、同時に彼自身の自然を變化せしめる。彼は彼自身の自然の中に眠つてゐる潜在力ポテンツを展開して、その力の活動を彼自身の支配の下に置くのである」(註一)。人間の勞働を有機體と自然との間の物質代謝一般から區別する所以のものは意識性といふことである。蜘蛛が網を張り、蜜蜂が窠房を築き、鳥が巢を作る場合のやうな本能的な活動と異つて、勞働には豫め意識された目的が存在する。従つて「勞働過程の終りに出てくる結果は、その初めにおいてすでに勞働者の表象の中に、かくてすでに觀念的に、存在してゐたものである。彼は單に自然的なものの形態を變化せしめるのみではない。彼は自然的なものの中に同時に彼の目的を實現するのであるが、その目的は、彼が意識してゐるものであり、法則として彼の行動の種類および様式を規定せねばならぬもの、亦彼の意志をそれに從屬せしめなければならぬものである」(註二)。もちろん人間は動物から形而上學的に區分されるのではないから、彼の勞働も最初は「動物的本能的」な形態を採らざるを得なかつた。だがそれは發展して人間固有のものとなるに及んで、意識的、合目的な活動であることを本質に持つたのである。

(註一) 「資本論」第一卷第三編第五章

(註二) 同上

動物の生活々動が本能的で、極めて限られたものであるのは、彼がただ自己の身體器官のみを以つて自身と自然との間の物質代謝を營むが故である。各々の器官にはそれに相應の機能が具備されてゐるのだから、同一の器官をもつてしてはそれに相應する一定の機能しか營むことは出來ない。そこで、自身の身體器官のみをもつて活動する動物においては、活動の種類や様式はつねに一定しており、それが習慣的に反覆され、習性又は本能となつて遺傳される。



新しい活動形態の發展は新しい器官が形成されることなしには不可能である。だが動物は決して自然的環境に働きかけるための器官を自身で造り出すものでなく、彼のあれこれの器官の退化や進化、新しい器官の出現は自然淘汰の結果であるから、動物は何ら自分で自分の「歴史を作る」ものではない。一般に動植物の進化史は専ら自然淘汰の所産であつて、自然的生活環境の變化を抜きにしては説明出來ぬものであり、その限りそれは自然史の範圍を出ない。

これに反し人間は自分で自分の歴史を作る。そしてそれは實に労働のおかげで可能なのである。人間の労働が本能的でなく、意識的、計畫的、合目的であり、それに關聯して多様な形態を採り、益々進歩するのは、それが人間の單なる自然的器官、身體器官のみを以つてする限られた活動、習慣的に繰返される行爲でなく、人工的器官とも云ふべき、益々改良され、多様化される労働手段（労働要具）を以つて營まれる行爲だからである。自然に働きかけ、生活を資料を獲得するための要具を自分で造り出し、それによつて自身の自然的器官の制限された能力を補足するといふことは、ひとえに人間のみを爲しうるところである。だからフランクリンは人間を定義して「道具を造る動物」と云つた。「労働手段の使用および創造」は「特に人間の労働過程を特徴づける」（註一）ものであり、「労働は道具の製造と共に始まる」（註二）ものである。労働手段の發達は自然に對する人間の權力を益々強化し、いはゆる物質的文化、従つてまた精神的文化を益々豊富に蓄積し、益々發展させる。このやうに、人間が自分の歴史を作るといふことは、彼が労働手段を作り出すといふこと、人工的器官をもつてする労働を媒介として自身と自然との間の物質代謝を營むといふことを基礎とするのである。「人間の個體の、よつてもつて動物から區別される所以の最初の歴史的行動は、彼等が思惟するといふことでなく、却つて彼等が彼等の生活資料を生産し、始めるといふことである」。「人間は意識に



よつて、宗教によつて、その他任意のものによつて、動物から區別され得る。人間自身は、彼等が彼等の生活資料を生産し始めるや否や、自己を動物から區別し始めるのである（註三）。生活資料の生産（單なる獲得でなく）は、人間の労働において初めて爲されうることであつて、動物にとつては自然によつて與へられる出來合ひの生活資料を消費するといふことが特徴的である。

（註一）「資本論」第一卷第三篇第五章

（註二）「猿の人間への進化における労働の役割」

（註三）「ドイツ・イデオロギー」

合目的な活動としての人間の労働にも、その前史に、「動物的、本能的な労働形態」があつたのに相應して、人間が労働手段を製造し得る段階に達するまでには、やはり永い前史があることを忘れてはならない。猿が石や棒片れを時々使用するやうに、人間の動物的祖先も最初は出來合ひのままの自然物を労働手段に役立てた。「土地は彼の食糧品の寶庫であると同様に、彼の労働手段の原始的藏庫である。それは例へば彼に、彼が投げたり、磨つたり、壓したり、切つたり抔するための石を提供する」とマルクスは云つてゐる（註一）。人間の祖先は、野獸やその他すべての敵對するものとの鬭争において、土地が偶然に提供した石や棒や骨片をそのままの形で利用しつつも、それによつて自分の自然的器官、特に手を精巧ならしめ、それと共に徐々に系統的に自然物を自己の活動手段たらしめるに至つた。そして遂に道具を調製し得る迄になつて、初めて彼は動物的存在を止めて人間となり、動物界から、自然への受動的適應から合目的な労働の王國への、歴史の世界への飛躍をなしとげたのである。原人が石器の製作を覺えたのは數萬



年の昔である。マルクスは「總じて労働過程は幾分かでも發展するや否や、豫め加工された労働手段を要求する」と云ひ、「人類史の初めにおいては加工された石、木材、骨、介殼と並んで馴養された、即ちすでに労働によつて變化せしめられ、改良された獸が労働手段として主要な役割を演じた」ことを指摘してゐる(註二)。これらの手段をもつてする労働こそが人間の祖先を動物界から人間へと飛躍せしめた決定的なものであつた。

(註一) 「資本論」第一卷第三篇第五章

(註二) 同上

人間の類猿的な祖先から原人への進化や、原人から近代人への進化の基礎を成すものが労働であつたとすれば、近代人の社會的、歴史的發展の基礎に横はつてゐるものも亦労働である。だから人間の心理やイデオロギーの特徴を規定する社會經濟的構成の變遷、一つの構成から他への轉化、の根柢には「生活資料の獲得様式」即ち労働の様式、物質的生産の様式の變化、發展が横はつてゐなければならない。ところで「生活資料の獲得様式」の變化は労働過程において機能する生産力の發展程度に依存するから、労働が人類史の基礎であるといふ命題は、一層精密には、政治的

Ⅱ 法制的形式や社會的意識の諸形態の現實的基礎を成す社會經濟的構成——生産關係の體系——の特徴は生産力の發展程度によつて規定される、といふ風に定式づけられる。

そこで、先づ生産力について究明し、次に生産關係なるものを明確に把握し、兩者間の辯證法的交互關係を理解することが課題となる。



## 第二節 生産力

### 生産力とその諸要素

労働、物質的生産はつねに一定の歴史的な社會經濟的構成の中で、即ちあれこれの歴史的に規定された生産關係の下で遂行されるところの社會的・歴史的行為である。だから「労働過程は、非歴史的であり自然的であるといふかぎりにおいては、また非社會的であるといふことができよう」(大森義太郎氏「唯物史觀」といふが如きは甚だしい誤謬である。人間は一定の社會構成の中で労働するからこそ、各々の社會構成は生産力の一定の發展程度に照應するのである。もし労働を非社會的なものと規定するならば、「資本論」において語られてゐる「商品の中に表現された労働の二重性」について、即ち商品を生産する労働は使用價值を生産すると同時に價值(交換價值)を生産するといふ事情について、正に何ごとをも理解することは出来ないだらう。蓋し労働が、商品生産といふ一定の經濟的發展段階において使用價值並びにそれによつて亦價值を生産するといふ、この二重の特質を獲得することは、労働が社會的・歴史的範疇でなければあり得ないことである。労働はかやうに歴史的範疇であるから、その形態は歴史的に變化し、發展するもので、決して不變な、固定したものではない。併しながら「人間生活の永久的自然條件」としての労働は、人間生活のあらゆる歴史的形態・あらゆる歴史的段階において共通なる「一般的性質」(マルクス)を持ち、それが各々の社會構成の中で歴史的に規定された特殊性において具體的に存在するのである。そこで吾々は、労働、物質的生産が種々の歴史的時代に如何なる様式において行はれるかを考察する爲には、その前に



労働過程のこの「一般的性質」を知つて置くことが必要となる。だからといつて、労働が非歴史的範疇として考察されるのではないことは勿論である。吾々はただ、労働の歴史的に特殊な形態を理解するためには、前以つて労働過程をその抽象性において、「一般的性質」において考察せねばならぬと言ふまでである。

さて労働過程をその「一般的性質」において、云ひかへれば「人間と自然の間の物質代謝の一般的條件」、「人間生活の永久的自然條件」又は「使用價值、又は財貨の生産」といふその「一般的性質」において考察することは、それをその「單純な抽象的な諸契機」の側から吟味することに外ならない。生産力の諸要素とは取りも直さず労働過程のかかる契機の謂ひである。ところで「労働過程の單純な契機は合目的な活動又は云ひかへれば労働そのものと、その對象と、その手段である」(註)。労働そのものは即ち「労働力の使用」であるから、結局、吾々は労働過程の「單純な抽象的な諸契機」又は生産力の諸要素として、労働力と、労働對象と、労働手段(労働要具)を擧げることが出来る。労働對象と労働手段はまた一括して生産手段と呼ばれる。以上三つの要素、又は労働力(従つてその所持者たる労働者)と生産手段は、社會構成の如何を問はず、つねに、あらゆる時代において生産過程の基本的要素である。

(註) 「資本論」第一卷第五章

因に、マルクスは労働力と生産手段の統一をも、分離の状態において見られた兩者の各々をも、生産力と呼んでゐる。しかし便宜上この二つの場合を區別して、前者を生産力、後者を生産力の要素又は要因と呼ぶことが現在廣く行はれてゐるし、またそれは便利でもある。生産力といふ言葉の種々の意味内容や、それに關聯して生産力と生産力の要素との概念上の區別については、拙著「唯物論哲學のために」の中の論文「生産力の諸要素に就いて」において述べて置いた。



生産力のかかる基本的要因について、マルクスが如何に説明したかを見よう。

労働力——「吾々が労働力又は労働能力として解するものは、人間の肉體の中に、生ける人格の中に存在し、そして彼が何らかの種類の使用價値を生産する度にいつも運動せしめるところの肉體のおよび精神的能力の總體である」(註一)。労働力は自己の實現としての労働において、人間の筋肉、神經、腦等のエネルギーの一定量として消費される。だが、このエネルギー、従つて労働力は、決して單に物理的なるもの、生理的なるものでなくて、社會的・歴史的な内容を持つものである。手の技巧や感受性の鋭さや知能はすべて「生活資料の獲得様式」と共に發展する歴史的産物であり、労働力のかかる歴史性は、労働力の造出(生産)と維持(再生産)のためにはやはり歴史的産物たる生活資料——衣食住——が必要とされるといふ事實の中に表現される。労働者に必要な衣食住、従つてそれへの欲望は國土の氣候その他の自然的條件に従つて種々雑多であり、例へば衣服への欲望は熱帯と寒帯とでは異つており、食物にしても海岸と山間の僻地とでは當然別であり、家屋の建築材料も森林の有無によつて異つたものが要求される等々。だが「他面においてはいはゆる必要なる欲望の範圍はその充足の仕方と同じくそれ自身一つの歴史的産物であり、従つて大部分は國土の文化段階に依存し、就中また本質的には、自由な労働者の階級が如何なる條件の下で、従つて如何なる習慣と生活上の要求とを以つて形成されたかといふことに依存する」(註二)。「自由な労働者の階級」はブルジョア社會のものであるが、しかし労働力に「歴史的および道德的要素」が内包されることはあらゆる歴史的社會構成において同様である。マルクスはまた「人間の一般的本性を變改し、それが一定の労働部門において熟練と敏捷とを得て發展せる特殊な労働力となるやうにするには、一定の教養又は教育を必要とし、そして後者は後者で大なり小なり



の、高の商品等價物を要する。勞働力の被媒介性の大小に應じてその教育費は種々異つてゐる」とも書いてゐる(註三)。

(註一) 「資本論」第一卷第四章

(註二) 同上

(註三) 同上

勞働力の社會的、歴史的性質は元來、その所有者たる勤勞者がつねに一定の歴史的に生成せる生産關係、社會構成の内部で一定の地位を占めるといふこと、階級社會においては一定の階級を構成するといふこと、によつて規定される。だからこそ一定の勞働力の生産、再生産のために要求される生活資料は時代の文化水準、就中働く人間の階級の習慣や生活上の要求に依存するのである。従つてまた、階級社會において一定の階級によつて所有される勞働力は、必然的に階級的性質を帯びることとなる。これは、生産力の階級的性質を理解する上に決定的に重要な事情である。ここから生産力と生産關係のコンフリクトの際における勞働力の特に決定的な役割が歸結されてくる。

勞働對象——「原始的には食糧品、出來合ひの生活資料を人間に供給する土地(經濟上では水もまたここに含まれる)は、人間の助力なしに人間勞働の一般的對象として存在する。勞働によつて、ただ地球體との直接的聯關から分離されるといふに止まる一切の物は、自然に存在する勞働對象である。その生活要素たる水から離され、捕獲される魚、原始林において倒伐される木材、鑛脈から引き裂かれる粗鑛がそれである。これに反し勞働對象がすでに以前の勞働によつて謂はば濾過されてあるときには、吾々はそれを原料と名づける。例へば、すでに引き裂かれて、今や洗淨されるところの粗鑛がそれである。一切の原料は勞働對象であるが、すべての勞働對象が原料なのではない。勞働



對象は、すでに労働によつて媒介されて變化を受けてゐるときにのみ原料である」(註)。

(註) 「資本論」第一卷第五章

ここでマルクスは明かに労働對象を二つに、即ちこれから初めて労働を加へられる自然的對象と、すでに労働を加へられており、そして一層の加工のための原料となるところの對象とに分けてゐる。マルクスによれば採鑛、狩獵、漁撈等のやうな抽出的産業や處女地を開墾する場合の農業にとつてはその労働對象は自然に存在し、これに反し他のすべての産業部門においては「原料、即ちすでに労働によつて濾過された労働對象、それ自身すでに労働生産物」たる對象が取扱はれる。で、「普通に自然の産物と見做される動植物も、恐らくは前年の労働の産物であるが、單にそればかりでなく、その現在の形態においては、幾代もの間、人間の統制下に、人間労働を媒介として續けられた變化の産物である」(註)。

(註) 「資本論」第一卷第五章

更に進んでマルクスは原料は一つの生産物の「主要實體」(Hauptsubstanz)を形成するか、又は單に補助材(Hilfsstoff)として生産物の形成に關與するといふことを指摘する。補助材は蒸汽機關用の石炭や車輪の油の如く労働手段によつて消費されるか、又は鹽素や染料の如く生産物の「主要實體」となる原料に「素材上の變化」を與へる目的で附加されるか、又は作業場における點火や暖熱上の素材の如く労働それ自身を支持するために使用される。だが本來の化學工業においては、使用されるすべての原料はその質的變化の結果、何れもその直接性において生産物の實體として再び現はれはしないから、主要材(Hauptstoff)と補助材の差別は消滅する。



同一の物でも種々の性質を有してゐるから、種々の産業部門において種々異つた仕方を利用して得る。例へば、製粉業にも、澱粉製造業にも、醸酒業にも、飼畜業にも原料となり、また直接に農業においてそれ自身を再生産するためにも原料として役立つところの穀物がそれである。また牛が牧畜業にとつては原料であり、農業においては役畜として使用される場合のやうに、同一の物が産業部門の異なるにつれて、或は原料として、或は労働手段として使用されることがあり、消費し得べき生産物が新たに他の生産物の原料となる場合もある（例へば果實から果汁を抽出し、牛乳から種々の製品を作るやうに）。或はまた棉花、繊維、絲の如く生産物がただ原料としてのみ再使用されうる形態で労働過程から出てくることもある。これらの生産物は最終の労働過程において初めて完成せる生活資料又は労働手段に仕上げられる。そこでマルクスは、これらの事情を總括して、「一つの使用價值が原料として現はれるか、労働手段として現はれるか、それとも生産物として現はれるかは、全く労働過程におけるその一定の機能に、それが労働過程の中に占める地位に、依存し、そしてこの地位の變動と共にかの職分も變動するのである」と結論してゐる。

このことは勿論、労働対象と労働手段の差別の消滅を意味しない。あらゆる労働過程において、労働対象と労働手段は「生ける労働の對象的要因」として、つねにその不可欠な一般的契機である。労働対象とは人間が働きかけるところの當の對象であり、労働手段とはこの働きかけを媒介するところの「人工的器官」であるから、兩者の差別があらゆる労働過程において存在することはおのづから明かである。

労働手段——そこで、労働手段について一層明白な説明を加へる必要がある。マルクスは云ふ。「労働手段とは、労働者が自身と労働対象との間に置き、この對象に彼の活動を傳へる傳導體として役立たしめるところの物、又は物



の複合體である。労働者は物の機械的、物理的、化學的諸性質を利用し、その物をして彼の目的に従つて他の物に對して權力手段として作用せしめる。労働者が直接に手にする對象は、——出來合ひの生活資料、例へば果實の採取の如く、労働者自身の身體器官のみが労働手段として役立つ場合を除外すれば、——労働對象ではなくて、労働手段である。かくて自然的なものそのものが彼の活動の器官となる。彼が彼自身の身體器官に附加して、聖書に反して彼の自然的體格を延長するところの器官となる」(註)。

(註) 「資本論」第一卷第五章

すでに述べたやうに、土地は出來合ひの生活資料を提供するものとしては労働の一般的對象であるが、それはまた近代人の祖先が労働手段として用ひた石や棒片れをも提供した。しかし乍ら多少でも發展した労働過程は豫め加工された労働手段を要求する。そして一聯のかやうな労働手段とそれに照應する比較的高い發展水準にある労働力が存在するときには、土地は本來の農業を可能ならしめる一條件、一手段となり、農業上の労働手段となる。例へば穀物を生産物とする農業部門においては、蒔かれる種子が主要材、肥料が補助材であり、土地は耕作、除草、收穫等のための要具と共に労働手段である。土地は農業においては、ただそれを開墾して農業上の労働手段に、即ち農耕に適する土地に、仕上げてゆく労働過程においてのみ、労働對象としてあらはれる。労働手段の發展程度や産業部門の種別の差異による、土地の役割のこのやうな變動は、土地に具備される多様な性質に基くものである。

マルクスによれば、「廣い意味」においては對象に労働の作用を傳へる傳導體として役立つ物の外に、總じて労働過程が行はれるために必要な「すべての對象的條件」が労働手段に算へられる。「それは直接に過程に入りはしない



が、それなしには過程は全然、又は不完全にしか行はれない。そしてここでも亦、労働者に「立脚點」を提供し、彼の労働過程に「作用部面」を與へるところの土地がこの種の「一般的労働手段」であり、「すでに労働によつて媒介されたこの種の労働手段には例へば労働建物、運河、街路等々がある」(註)。

(註) 「資本論」第一卷第五章

併しながら、かかる「一般的労働手段」としての土地はその一般性の故に何らの歴史的に特殊なものをも有せず、またここに擧げられた他の「廣い意味の」労働手段は不完全にしか労働過程に入るものでなく、農業における労働手段としての土地は、「本來の農業」のあらゆる發展段階において労働手段として残されるものであるから、これらすべてのものは、各々の歴史的社會構成における労働過程の特質を特徴づける上に代表的なものではない。労働過程の各種の歴史的性質、それに關聯して労働手段の歴史的發展そのものを、最もよく特徴づけるものは、對象への人間の活動の傳導體として、「人工的器官」として役立つ労働手段であり、その中でも「生産の筋骨體系」と呼ばれ得るものである。「労働手段そのものの中では、その總體を生産の筋骨體系と呼び得るところの機械的労働手段の方が、ただ労働對象の容器として役立つ、そしてその總體が全く一般的に生産の脈管體系として云ひ表はされ得るところの、例へば管、桶、籃、瓶等々の如き労働手段に比して、一つの社會的生產時代についてはるかに決定的な特徴的徵表を示すものである。後者は化學工業において初めて重大な役割を演じるのである」とマルクスは説明してゐる。今日においては、機械や運輸機關や發電および送電裝置等の著しい發展にも劣らぬ化學工業の顯著な發展は「生産の脈管體系」の意義をも少からず重要ならしめてゐる。吾々が技術と呼ぶところのものは、各々の生産部門の労働過程にお



る、主として生産の筋骨體系および脈管體系に屬する労働手段の組合せ、一口にいへば労働手段の一定の特殊な體系であり（各々の産業部門やその種々の労働過程に特殊な技術）、またこの體系一般である（封建社會の技術、現代の生産技術、等と云ふ場合）。

この種の労働手段が、「人工的器官」又はマルクスのいはゆる「社會的人間の生産器官」たることによつて、生産過程および社會發展において持つ重要な意義、特質に言及して、マルクスは次の如く書いた。「亡び去つた動植物種屬の組織を認識するにはその遺骨の構造は重要なものであるが、それと同様に、亡び去つた經濟的社會構成を判定するには労働手段の遺物が重要なものである。何が造られるかといふことでなく、如何にして、如何なる労働手段をもつて造られるかといふことが、經濟上の諸時代を區分するものである。労働手段は人間労働力の發展の測度器たるのみならず、また労働がその下で行はれるところの社會的關係の指標である」(註)。労働手段が労働力の發展の測度器であるのは、それが労働する人間の身體器官に附加され、彼の労働能力を量的にも質的にも高めるところの「人工的器官」だといふ事情から歸結される。労働手段はかかる「人工的器官」として人間労働力を補足するものであり、その補足の程度の大小、従つて労働生産性の程度は基本的には労働手段によつて測定されると同時に、労働力に含まれる技能の發展度も労働手段の精粗に照應し、且つそれによつて指標される。

(註) 「資本論」第一卷、第五章

だが最も重要なことは、労働手段の一定の發展水準が、それに照應する一定の社會經濟的構成の指標となるといふことである。このことは、各々の特殊な歴史的社會構成にはその固有な技術的基礎があるといふ事實を語るものである。



る。そこでマルクスは次の如く述べる。「技術學の批判的歴史は、總じて、十八世紀の何れの發明も如何に個々の個人に屬すこと少なきかを證明するであらう。今までかかる勞作は存在してゐない。ダーウ、インは自然的技術學の歴史に、即ち動植物の生活にとつての生産要具としての動植物の器官の形成に關心を向けた。社會的人間の生産器官、各々の特殊な社會組織の物質的基礎の形成史も、同様の注目に價しないだらうか？　そしてそれはより容易に提供されはしないだらうか？　何故ならヴ、ハ、コ、の云つたやうに、人類史が自然史と異なる所以は、前者は吾々が造つたものであり、後者はさうでないといふ點にあるからである。技術學は自然に對する人間の能動的態度、彼の生活の直接的生産過程を闡明し、そしてそれによつてまた彼の社會的生活關係およびそれから生ずる精神的表象の直接的生産過程を闡明する」(註)。あらゆる特殊な社會構成は、それに固有な物質的基礎としての、技術の種々異つた發展段階に依據するものである。だがもちろんこのことは、技術が生産關係を規定するといふことを意味しない。技術それ自身は勞働力なしには生産において運動するものでなく、生産關係に對して現實に働きかけ得るものではない。技術は實際には社會組織の可能的な基礎たるにすぎない。「勞働手段が、人間の勞働過程において決定的な意義をもつことは明かであらう。……そこで、生産關係は勞働手段——いまやそれは生産手段である(勞働手段と生産手段は同一でない——筆者)——によつて規定されると云はなければならぬ」(大森氏「唯物史觀」一七六頁、一八二頁)といふ技術主義的史觀は唯物史觀とは別なものである。これらの事情を解明するためには、生産力の發展の上にその諸要素が演じる役割を見ておく必要がある。そうして初めて技術と勞働力の關係の問題は正しく解決されるだらう。

(註) 「資本論」第一卷第十三章



## 生産力の發展におけるその諸要素の役割

「自然に制約された生産力」——労働は本來的には人間と自然（厳密には外的自然）との間の物質代謝の過程であるから、その生産力の發展の根本的前提を成すものは、自然の富とそれを使用價值たらしめる人間労働力の發展、従つてこの發展の契機となる技術の發展とである。労働生産物としての原料なるものは、これらの要素の結合から派生する受動的結果である。それは自然に存在する労働對象から抽出されたものであるか、でなければやはり何らかの仕方では自然的條件に結びついてゐるものである（例へば工業原料となる農業生産物）。だから、社會の總生産力の發展といふ見地から問題を取扱ふ場合には、労働對象の中で基本的に重要なものは、自然に制約された物である。抽出的産業において労働對象となる自然的資源（例へば石炭、石油、金屬）の發見、開發は生産力の發展を促進する重要な契機である。

だが自然物は單に労働對象となることによつてのみ生産力の要素となるのではない。すでに見たやうに、土地は未だ道具を作り得なかつた人間の祖先に對して出來合ひの労働手段の「原始的藏庫」として役立つた。もちろん人間の本來の労働過程が「人工的器官」を本質的契機とする以上、「労働手段の老大なる多數は極めて皮相な觀察に對しても過去の労働の痕跡を示す」（註）こととなる。にも拘はらず、「廣い意味の」労働手段の中には、運河や道路の如く一度び労働對象となり、労働によつて濾過されて労働手段となつたものの外に、例へば航行し得る河川（これも一般的に云へば「土地」の範疇に入るものであらう）のやうに、自然に存在するものもあり、それが生産過程において一定の役割を演じることが否めない。



これらの、外的自然によつて興へられる條件の外に、人種といふやうな「人間の自然」も生産過程に入り来る自然的條件の一つであるが、人間は外的自然への働きかけにおいて自身の自然をも變へるのだから、労働のおかげでその類猿的な祖先から人間に進化した現代の人種については、それを純粹に自然的なものとすることはできない。で、人種的差別なるものはむしろ歴史的発展水準の差別として理解さるべきで、人種間の體質上の相異による能力上および生活要求上の相異を固定的なアプリアリなものに見做すのは誤謬である。ただそれらのものが人種間や個人間の遺傳的素質の相異に或る程度まで基いてゐるとすれば、これを相對的に自然的なものと見做すことは一應理由を持つてゐる。といふのは、人間の遺傳的、生理的素質なるものは、謂はば社會的、歴史的自然であつて、原料や人工的労働手段の如き労働生産物と異つて、何ら生産上の必要に應じて意識的に造り出されたものでない、といふ特質を有するからである。だが何れにしても「人間の自然」は外的自然と同じ意味で生産過程の自然的條件になるのではない。例へば「賃銀の民族的差異」といふ如きものも、これをよく見れば、諸民族の經濟的および一般に歴史的発展水準の差異や、また附隨的ではあるが生活資料の富源たる外的自然の差異によるものであつて、決して人類なり民族なりの純自然的素質（そういふものは存在しない）の差異から來るものではないことが分る。また民族間や個人間の生得的な能力のやうなものについて見ても、極く少數の特殊な蠻族を除けば、絶對的に全人類の平均水準に追ひ付き得ないといふ様な素質の民族はなく、また各個人の素質は一定の平均値に近いものであるから、これもまた生産過程の要素となる自然的條件としては取るに足らぬものである。「人間の自然」を純自然的なものと見、そして經濟的および一般に社會的發展におけるその役割を誇張するのは人種論者である。



そこで、自然に存在する生産力の要素として問題になるのは外的自然に屬するものである。マルクスはこの種の、「自然に制約された生産力」の意義について次の如く述べる。「労働手段および労働對象がそれ自身生産物（過去の労働の——筆者）である限り、労働は生産物（新たな——筆者）を造り出すために生産物（過去の——筆者）を消耗する譯である、云ひかへれば生産物を生産物の生産手段として利用する譯である。しかし労働過程が原始的にはただ人間と彼の助力なしに存在する土地との間のみ行はれるものであるやうに、労働過程においてはつねになほ、自然に存在し、自然質料と人間労働との何らの結合をも表現しないやうな生産手段もまた役立つてゐる」(註)。

(註) 「資本論」第一卷第五章

マルクスは更にこの種の自然的條件を生活資料の資源と労働手段の資源の二つに分け、人類史の發展段階の相異に應じて兩者の演じる役割の比重に相異が生じることを指摘する。「外的自然條件は經濟學上二大部類に、即ち生活資料の自然的富源、つまり土地の肥沃度、魚類に富む河海湖沼等と、急激なる落流、航行し得べき河川、森林、金屬、石炭等の如き労働手段の自然的富源とに分たれる。文化の端初においては前者が決定を與へ、より高い發展段階においては第二の種類の自然的富源が決定を與へる」と彼は書いてゐる(註)。これは、文化の發展に伴つて、生活資料の獲得において自然の恩恵に直接に頼るよりも、自然に積極的に働きかけて、そのままでは生活資料とならないものを生活資料に變形せしめることが決定的となり、従つて生活資料の生産そのものが次第に生産手段の生産に依存するに至るといふことを意味する。だからマルクスがここに労働手段と云つてゐるのは實は嚴密には生産手段である。

(註) 「資本論」第一卷第十四章



ところでこれらの二つの自然的富源の役割が文化の發展水準の如何に應じてその比重を變へるといふことは、自然的環境が社會發展を規定するといふ地理的唯物論や一般に地理學的偏向を反駁するものである。労働手段が發達し、自然に對する人間の積極的働きかけが強化するにつれて、却つて社會發展が社會生活における自然的條件の役割を規定するといふ傾向が決定的となる。だからマルクスは「自然力を社會的に統制し、節約し、それを人間の手によつて大規模に占有するか又は馴致することの必要性が、産業史上最も決定的な役割を演じる」と云つてゐる。餘りに豊饒な自然の下にあつては、人間はその自然にたよつて満足に生活出来るから、生産力發展の強い刺衝がなく、これに反し土地の生産物が場所によつてさまざまに異なる所では、有無相通じるとか、自然的に與へられてゐない生活資料に代はるものを人爲的に造り出す必要が起り、それが生産力發展の大きな刺衝となる、といふ事實、——この事實はつまり「自然力を社會的に統制する……ことの必要性」こそが生産力の發展の契機であるといふことを立證するものである。この事實を述べてマルクスは右の引用句のすぐ前で、資本の母國は鬱蒼たる草木を有する熱帶でなくて温帶であると云ひ、「社會的分業の自然的基礎を形成し、且つ人間の周圍の自然事情の變化を通して人間を彼自身の欲望、能力、労働手段および労働様式の多樣化へと驅り立てるところのものは、土地の絶對的豊度でなくてその分化であり、その生産物の多樣性である」(註)ことを指示してゐる。

(註)「資本論」第一卷第十四章

自然的富源はそのままでは未だ生産力の要素、生産の要因ではあり得ない。それは、それを生産過程に引き入れ得る社會的條件が、即ち技術の適用の可能性が存在するとき、初めて生産力の可能的要素となる。それで、技術の適用



の可能性といふのは、單に技術でなくて、その適用の必要性を規定する社會的事情をも指してゐる。で、例へば利潤の捻出が生産力發展の推動力であるところの資本主義の下では、その開發が技術的に可能な多くの資源が生産過程の圏外に置かれてゐるのである。これに反し、インフレーションで金の價格が暴騰すれば、今迄勘定に合はないものとして見棄てられてゐた金鑛が一時開發されたり、海底に沈んだ金塊を引上げよう抔といふ山師もあらはれてくる。

吾々は先きに自然的條件は勞働手段として役立つことによつても生産力の要素となることを指摘したが、高度に發展した生産力の段階においては、特に資本主義の發生以來、最も重要な役割を演じる自然的條件はやはり抽出的産業において勞働對象となるところのものだといふことを忘れてはならない。現代帝國主義列強間の領土再分配の紛争に當つて市場の獨占と並んで目標とされる資源の獨占において、金屬、石炭、石油の如き自然的富源の獨占は極めて重要な目標となつてゐる。そしてここでも自然的富源が資本主義的に獨占されてゐて、開發はされないといふやうな事情が普遍的に見られるのである。

技術——すでに見たやうに、技術の發展は生産力の發展の第一前提であり、各々の歴史的社會構成は、生産力の一定の發展水準に照應するものである限りその一定の技術的基礎を有する。「手挽臼は封建領主の存在する社會を生ぜしめ、蒸氣臼は産業資本家の見出される社會を生ぜしめる」とマルクスは云つた(註)。吾々は産業革命がブルジョア社會の技術的基礎の造出過程に外ならなかつたことを知つてゐる。ソヴェート聯邦において、國民經濟の社會主義的再建の時代、「再建期には技術がすべてを決定する」と唱へられたのも、やはり新社會にはそれに固有な技術的基礎がなければならぬことを意味するものである。レーニンはかかる技術的基礎の設定において電化が決定的な意義をも



つことを見た。

(註) 「哲學の貧困」第二章第一節

生産力の發展における技術の役割については、これ以上説明を要しないから、今度は、技術の發展の諸特徴を一瞥する。

「人間は自己の實踐的活動において客觀世界を眼前に持ち、それに依存し、それによつて自己の活動を規定する」のだから、「外界、自然の法則……は人間の合目的な活動の基礎である」。で、自然に對する人間の活動が成功的であるためには、自然法則の認識と、この自然法則によつて規定された活動手段——技術——とが必要となる。勞働過程において人間は自然法則に對抗するのではなく、それに従ふことによつて、自然を征服するのである。だから「機械的および化學的技術が人間の目的に役立つのは正に、その特徴(構成)が外的條件(自然法則)による被規定といふことにあるからである」(註)。即ち、技術の構成は自然法則によつて規定されてゐるからこそ、それは自然への人間の働きかけに役立つのである。ここから、技術の進歩には自然認識の發展、自然科學の進歩が缺くべからざる契機を成すといふことが理解される。自然科學は技術を通して勞働過程に結びつき、技術との結合において生産力の要素となる。

(註) レーニン「哲學ノート」中のヘーゲル論理學の概念論に關する部分參照

しかし乍ら、さうかといつて、科學の進歩を技術的發展の根本原因と認めたり、生産力の發展の原因と見做すカウツキー流の見解は正しくない。それは唯物史觀ではなくて唯心史觀である。反對に、科學が技術に役立つのはその發



展が本來的には技術上の要求や技術上の進歩によつて規定されてゐるが故である。だからエンゲルスは「技術は大部分、科學の狀態に依存してゐるとしても、この科學はまた更に多く技術の狀態および要求に依存してゐる、もし社會が一つの技術的要求を持つてゐるならば、このことは十の大學よりも科學の發展に資するところが多い」と述べてゐる(註)。彼はまた古代において天文學が牧畜上および農業上季節を知る必要から起り、天文學の發展が必然に數學の發展を伴ひ、更に農業の一定の段階において、また或る國々において(灌漑用の水揚げのため)、特に都市と大建築の發生、手工業の發展と共に力學が發展し、それがやがて航海、海上および軍事上必要なものとなつたことを指摘して、「かくてすでに最初から科學の發生と發展は生産によつて制約されてゐる」と云ひ、近代科學の目ざましい發展も、「これまた生産のお蔭である」と斷定してゐる。そして第一に、十字軍以後の産業の發達(機織、時計製造、水車、染色、冶金、酒精、眼鏡等々)が科學上の研究材料と實驗手段を提供したことを指示し、近代科學のかかる發展を促した條件として、なほ、第二に、西歐と中歐における商品生産の發展、第三に、資源や市場の獲得を目的とする地理上の發見による氣象學、動植物學および人間の生理學の新材料の集積、第四に、印刷機の出現をあげる(註二)。マルクスも科學の進歩における技術の役割について言及して、「十七世紀に機械が此處彼處で適用されたことは、極めて重要である。蓋し、それは、當時の大數學者達に近代力學の創造のための實踐的支持點と刺戟材を提供したからである(註三)と述べてゐる。

(註一) シュタルケンブルグ宛手紙

(註二) 「自然辯證法」岩波文庫版上卷一四九頁



科學はかやうに技術上の状態と必要によつて發展することによつて、技術の發展の契機となる。しかし、技術を基礎とする技術と科學のかかる交互作用による、兩者の進歩はつねに一定の社會的・歴史的條件の下でのみ實現され得るものである。技術は決してあらゆる社會經濟的構成の下で平等にも、同じ條件によつても、發展したのではない。各々の社會構成の下で技術は異つた歴史的條件によつて發展する。

資本主義の下では技術は賃銀労働者を *aushbeuten* するための手段として發展する。マルクスは手工業的技術を基礎とするマニユファクチュアから機械をもつてする大工業への發展の上に重要な役割を演じたものとして資本家と賃銀労働者のアンタゴニズムを強調した。「手工的熟練が依然としてマニユファクチュアの基礎であり、マニユファクチュアで機能する總機構は労働者自身から獨立な何らの客觀的骨格をも有してゐないのだから、資本はたへず労働者の我儘と戦はねばならない。……だからマニユファクチュア時代全體を通じて労働者の訓練不足に對する怨嗟が絶えなかつた」(註一)。そこで「労働者に對抗する勢力」としての機械が採用されることとなる。「機械は資本の専制に對する労働者の周期的な反抗、ストライキ等の壓伏のための最強の武器となる。……ひとは労働者の反抗に對する資本の武器としてのみ出現した一八三〇年以來の諸發明の全歴史を書くことが出來よう。吾々の何よりまづ想起するのは自動ミュール紡績機である、といふのはそれは自動的體系の新時代を開いたものであるから」(註二)。機械は資本主義の下では労働者の手工的熟練の意義を小ならしめ、熟練労働者の「我儘」を押へつけ、婦人や兒童を低賃銀で雇ふことによつて労働者一般の賃銀を引下げ、労働日を延長し、労働を強化し、多數労働者の労働力を機械で「代補」するこ



とによつて失業者の大群を造出し、かくして労働者の隷屬状態を益々強固ならしめる。自働的體系はこの方向における機械の効果を決定的ならしめたものであつた。資本主義社會における技術は、労働者の生活條件の悪化の條件である。「労働手段は機械としては直ちに労働者自身の競争者となる。機械による資本の自己増殖は機械によつて生存條件を破壊される労働者數に正比例する。……機械が徐々に生産部面を捉へるところでは、それは機械と競争する労働者層の中に慢性的貧困を産出する。推移が急激なところでは、機械の影響は大量的であり激烈である」(註三)。

(註一) 「資本論」第一卷第十二章第五節

(註二) 同上第十三章第五節

(註三) 同上

資本主義の上向的發展期における技術の著しい進歩を制約したもう一つの重要な條件は、資本家相互の自由競争である。後れた技術をもつて生産する資本家は、發展した新技術によつてより安價な商品を生産する資本家に壓倒される。だがかかる過程の反覆は次第に少數巨大資本家の手中への生産の集中および獨占を生む。かやうにして資本主義が獨占資本主義の段階に入ると共に、進んだ技術による後れた技術の驅逐に、獨占資本家の團體による「非加入者」の驅逐が取り代はる。そこで、獨占資本主義の時代には技術發展の停滯の傾向があらはれる。多くの技術上の新發明は獨占資本の手によつてその特許權を獨占され、握り潰される。獨占資本主義——帝國主義——特にその現段階においては、國際間の矛盾の鋭化に照應して、ただ軍需工業の技術のみが顯著に發達し、その他においては一般に技術進歩の停滯が見られるために、科學、特に理論自然科學は技術から游離し、それだけにそれはスコラの、神秘主義的世



界觀の強い影響の下に置かれてゐる。だがもちろん、資本主義的獨占は「自由競争を驅逐してしまふのでなく、自由競争の上に、且つそれと並んで存在する」(レーニン)のだから、帝國主義の時代にも部分的な技術的進歩は無くなつてゐるのではなく、そしてそれは資本主義的合理化における技術的改良において觀取されるやうに、つねに労働者の負擔において強行される。技術が労働者に對抗する「資本の武器」であるといふ命題は機械の導入によつて自らの技術的基礎を確立して以來の資本主義の全時代を一貫する眞理である。

かくて技術の進歩には労働者と労働手段、一般に生産手段の關係の如何が本質的聯關をもつてゐることが分る。古代社會においては労働者は奴隸として生産手段と同じく直接に主人に所有され、奴隸所有者は奴隸の強制労働に寄食した。封建社會においては労働する農民は土地以外のあれこれの生産手段を所有し、領主・地主は農民の收める地代によつて生活した。かういふ事情の故に、奴隸所有者や封建領主は技術の發展に對して、労働手段の所有者たる資本家のやうな關心を持たなかつた。彼等の地位を安全ならしめるものは、技術の發展でなくして、奴隸に對する鞭であり、土地獨占を基礎とする經濟外強制であつた。もちろん、すでに明かなやうに、資本家にとつて決定的に重要なことは、労働者が——典型的な場合にはその「自由意志」によつて——資本の支配下にあり、以つて彼に利潤の生産を保證することであつて、機械の發展もこの目的において爲されたとすれば、同じこの利潤獲得といふ目的のために帝國主義時代には技術進歩は相對的停滯の傾向をとる。

技術は如何に重要なものであるにせよ、それはただ一定の歴史的條件の下で、労働力との結合においてのみ生産に役立ち、労働對象に對する人間の「權力手段」として作用し得るものである。



労働力——マルクスによれば人間労働とは「流動状態にある人間労働力」であり、「人間労働力の支出」である。「労働力はただその外化 (Ausserung) を通してのみ實現され、ただ労働においてのみ實證される」(註一)。労働力はだから労働過程における最も積極的な要因であり、生産力の最も決定的な要素である。原料や人工的労働手段はもとく労働の生産物であり、労働力の實現としての生ける労働の火に浴して初めて生産力の要素として機能する。「労働過程において役立つない機械は無用である。しかのみならずそれは自然的物質代謝の破壊力の犠牲となる。鐵はさび、木は朽ちる。織られない、又は編まれない棉絲は、無駄になつた棉花である。生ける労働はこれらの物を捉へ、それらを死から呼びさまし、それらを單なる可能的使用價值から、現實的な、作用するところの使用價值に轉化しなければならぬ」(註二)。

(註一) 「資本論」第一卷第一章および第四章

(註二) 同上第五章

マルクスはまた「哲學の貧困」において……階級を最大の生産力と呼び、レーニンは「全人類の第一の生産力は労働者であり、勤勞者である」と云つた(註)。技術は労働力の發展を制約し、技術の一定の發展水準はそれに照應する労働者の技能を要求するが、このことは本來、技術が労働者の「自然的體格を延長」する「人工的器官」として造出され、人間労働力を補足するものであるといふ性質から歸結されるものであつて、決して労働力が最も根源的な生産力要素だといふことを排除しない。

(註) 演説「自由および平等のスローガンをもつてする民衆の欺瞞について」



あらゆる階級的社會構成において、他人の餘剩労働に寄食する人々の階級にとつて最大の關心は技術に向けられず、労働者に向けられ、この人々のために餘剩生産物を生産すべく餘儀なくされるやうな状態に労働者を置くことに向けられたといふことは、労働力が、従つてその所有者たる労働者が生産力の要素として如何に決定的なものであるかを立證する。

資本主義の發生は労働者——主として農民たる勤勞者——が權力の行使や經濟そのものの自生的運動のおかげで生産手段から「解放」され、自己の労働力を賣る以外に生存の途を失ふに至つた、といふ事情から出發した。かかる事情の下で、商業資本は賃銀労働者を收取する産業資本に轉化し、マニユファクチュアが發生した。資本主義的生產はマニユファクチュア時代に一大前進をなし遂げたが、それはいまだ封建制下の手工業的技術を基礎とするものであつた。云ひかへれば、資本主義も技術の再建から出發しないで、労働力の支配から出發したのである。

それにもかかはらず、即ちその狹隘な技術的基礎にもかかはらず、マニユファクチュアが資本主義的生產を著しく發展せしめ得たのは、生産力の要素としての労働力の特質によるのである。マニユファクチュアの労働形態は分業に基く協業である。ところで協業において、即ち「多くの手が同時に、不可分的作業において共同で働らくときに、展開される社會的力能」は、「個々の労働者の力の機械的總計」とは本質的に異つたものである。「結合された労働の作用はここで個々の労働によつては全然與へられないか、もしくは遙かに長時間をもつてのみ、又は極小の規模をもつてのみ與へられ得るにすぎぬであらう。ここで問題となるのは單に協業による個別的生産力の上昇といふことのみでなく、またそれ自身において集合力(Massenkraft)たるべき一つの生産力の創造といふことである」。かやうにして



協業において、「各種労働の結合」によつて生じる特殊な生産力、個々の労働者の力の機械的總計とは質的に異り、それを遙かに凌駕する「總労働者（結合された労働者——著者）の社會的生產力」が、「資本の生產力」として機能することによつて、マニユファクチュアはそれと同じ技術的基礎の上に立つツンフト的手工業に優越する（註）。農業のホルボズ的形態が小經營的技術に立脚するときにも個々の小經營の總計より優れてゐるのも、やはり結合された労働によつて與へられる特殊な生産力のおかげである。」

（註）「資本論」第一卷第十一章および第十二章

マニユファクチュアが一定の發展水準に達したとき、初めて大工業への移行の技術的前提が、機械の生産および應用がもたらされた。そして機械に基く大工業の發展によつて資本主義的生産は全産業部門に侵入して、それを支配するに至つたのである。だから「生産様式の變革はマニユファクチュアにおいては労働力を出發點とし、大工業においては労働手段を出發點とする」とマルクスは云つてゐる。

ソヴェート聯邦の建設に當つても、最初に必要な決定的條件は、従前と別な條件の下に置かれた労働力、但し生産手段からでなく生産手段とのアンタゴニズムから「解放」された労働者であり、さし當りこれらの労働者が従前から承け繼がれた技術的基礎の下で新たな労働規律（土曜労働、社會主義競争の如き）を創造することであつた。それについて「技術がすべてを決定する」再建期、國民經濟の技術的基礎の再建、この社會構成の土臺となるべき固有な技術的基礎の設定の時代がやつて來たのである。そして周知の如く第一次五ヶ年計畫の完成によつてこの基礎は据えられたと云はれてゐる。



これらすべてのことは、労働力が最も基本的、決定的な生産力——生産力の要素——であり、従つて生産力の歴史的発展の上に最重要な役割を演じるといふことを示してゐる。階級社会において、発展する生産力とその桎梏に轉化した舊來の生産關係のコンフリクトに當つて、社会のこの生産力の発展の利益を代表して該生産關係の變更のために物理的力を提供するものは労働力の所有者である。奴隷は奴隷制の……のために、農奴的農民は封建的土地所有の……のために、その物理的力を行使した。だが彼等は新たに生じた秩序において支配階級となるべき條件の下に置かれてゐなかつた。奴隷制の後には封建領主の支配が、封建制の後にはブルジョアジーの支配がやつて來た。これに對して、資本主義の特色は、技術が労働力に對抗する力として、後者に對して頽廢的作用を及ぼすと同時に、他面では労働力の所有者の階級がこの矛盾、この秩序の矛盾の唯一の解決者としてあらはれるといふ點にある。

もちろん、すでに見たやうに、これらすべての場合に、新秩序の固有な技術的基礎は舊秩序の胎内で成熟し切るものではなく、新秩序はつねにその生誕後に自己に固有な技術的基礎を完成させるものであるから、舊秩序の胎内ではただ新秩序の生誕の可能性を制約するだけの技術上の條件が成熟し切るにすぎない。だがそれにしても、新秩序の生誕、労働力の所有者の地位變更、が可能なるためには一定の技術的水準（勿論、新秩序の固有な技術的基礎ではない）が前提となることは云ふ迄もない。例へば封建社会がその發生の當時と同じ技術的水準において資本主義に取つて代はられたと云ふことは出來ない。しかしこのことは未だ、技術が生産關係を規定するといふことを意味せず、技術の自生的發展が新秩序を生むといふことを意味しない。舊秩序の中に新秩序の生誕の可能性が成熟してゐるか否かを知らる上に最高、の規準となるものは、社会の全生産力の發展の利益のために既成生産關係を *vernichten* して得る労働力の



所有者の階級の力であり、それは「ただ實踐的にのみ證明され得る」。このことを忘れた點にスハーノフやカウツキ一等を史的唯物論者から區別する重要な根據がある。

勞働力は階級社會においては一定の階級によつて所有されるのだから、生産力の發展における勞働力のこのやうな決定的な役割を認めないことは、單に生産力の社會的、階級的性質を理解せず、それを自然主義的に非歴史的な物として想定された勞働手段や技術や生産手段と見做す（例へばブハーリン、大森氏）ことに基いてゐるのみでなく、またそれは實に生産力の發展、一般的にいへば社會發展における Klassenkampf の役割を無視することを意味する。それは、勞働力を所有する階級が生産力を代表して（もちろん従前の社會においてはそれを意識せずだ）、既成生産關係、即ちまたその關係を固持する階級に對して闘ふといふ事實、この Klassenkampf の事實が生産力の發展、社會發展に對して有する意義を無視するものである。

これらの問題に關聯して、吾々は今や生産關係およびそれと生産力との交互作用の解明に向はなければならぬ。

### 第三節 生産の社會的形式としての生産關係

#### 生産力の諸要素の統一と生産關係

前節で述べた生産力の諸要素は、互ひに切離された状態においては何ら生産の現實的要因でなく、單にその可能的な要因たるにすぎない。現實的に機能する勞働生産力はこれらすべての要

素の統一である。「勞働生産力は多様な事情によつて、就中勞働者の技巧の平均度、科學の發展程度とその技術學的



應用、生産過程の社會的組織、生産手段の規模と作用能力によつて、また自然關係によつて規定される」(註一)。生産力の諸要素のかかる統一はつねに歴史的に特殊な様式をもつてなされ、特殊な社會的關係の枠の中で形成される。だから「自然に制約された労働生産力」も、それが生産力の要素として機能し、労働過程の契機となる限りにおいては必ずや一定の歴史的な社會的條件の下に置かれることとなる。で、例へばそれは資本主義の下ではマニユファクチュアにおける「生産過程の社會的組成」から、「結合された労働」から生じるところの「社會的生産力」と同様に「資本の生産力」となる(註二)。これに反し、人間の創造になる技術でも、他の要素との結合から、つまり現實的な生産過程から切離され、孤立において考察されるときには、自然法則に支配される自然物としてあらはれるにすぎない。一定の社會的關係から切離された技術そのものは經濟學的範疇でないといふのはこの意味である。それで、生産力をその單純な抽象的な要素において考察するに止らないで、その具體的な運動、發展を觀察しようとするときには、必然的に生産力の諸要素の統一、結合の様式が問題となり——蓋しそれらの要素は相互に結合して初めて運動の状態、生産過程に見出されるのだから、——この結合が、従つて生産がその下で行はれるところの社會的條件、社會的關係が問題となる。云ひかへれば生産様式と生産關係が考察の對象となる。

(註一) 「資本論」第一卷第一章

(註二) 同上第十四章

マルクスは云ふ。「生産の社會的形式が如何なるものであらうと、労働者と生産手段はつねに生産の要因たるを失はぬ。しかし、それらのものは、相互に分離した状態にあるときには、ただ可能的に生産の要因たるにすぎない。い



やしくも生産が行はれるためには、兩者は結合されねばならぬ。この結合が行はれる特殊な性質や仕方が、社會構造の種々の經濟時代を區別するものである〔註〕。云ひかへれば、歴史的に繼起する種々の社會經濟的構成の區分に當つて規準として役立つ徴表は、生産力の諸要素の結合がよつて行はれる所の様式、生産様式であり、生産力の運動、生産の發展の社會的形式、生産關係である。生産様式とは、一定の生産關係の下でなされる生産力の諸要素の結合の様式、従つてまた生産がよつてもつて行はれる様式、に外ならないから、それが生産關係の體系としての社會構造を特徴づけるものであることは自明である。

〔註〕「資本論」第二卷第一章

そこで、生産力の運動は、これをその社會的形式たる生産關係から切離して考察することは出来ないといふことが分る。「生産において、人間は、ただ自然に働きかけるばかりでなく、相互にも働きかける。彼等はただ、ある一定の仕方で共働し、また彼等の活動を相互に交換しあふことによつてのみ生産する。生産するために、彼等は、相互に一定の聯關および關係を結ぶのであつて、この社會的聯關および關係の内部でのみ、自然に對する彼等の働きかけが行はれ、生産が行はれるのである。……生産關係はその總體において、社會的關係、社會と名づけられるものを、しかも一定の歴史的發展段階にあるところの社會を……形成する〔註〕。

〔註〕「賃労働と資本」

生産關係とは、人間が労働過程において、生産に當つて、相互に入り込むところの歴史的に發展する社會的關係である。だから生産關係の概念なしには、各々の社會構成における物質的生産の特殊な法則、各々の歴史的時代におけ



る人間の物質的生活の秘密を暴露することは出来ない。マルクスは人間と人間のあらゆる関係における基本的なものを生産関係として把握することによつて、「資本主義的生産の自然法則」を、比類なく見事に別抉したのであつた。

「社會經濟的諸構成の自然史的發展過程に關するマルクスの根本概念」は、彼が「社會生活の種々の領域の中から經濟的領域を撰り出し、すべての社會的關係の中から『生産關係』を根本的な、一次的な、すべての殘餘の關係を規定するものとして撰り出すことによつて」仕上げたものである、とレーニンは書いた(註)。生産力の一定の水準に照應する生産關係といふ概念は、マルクス主義的全社會科學の基礎をなすものである。

(註)「人民の友とは何ぞや」第二部

#### 生産關係 の物質性

さて生産關係が人間の共同活動および活動の相互交換において成立するとすれば、その發生が原始時代における勞働の發達のおかげであることは明かである。エンゲルスは「猿の人間への進化における勞働の役割」の中で、勞働の發達が相互扶助、共同活動の場合を頻繁ならしめ、且つこの協力の必要を意識せしめたことによつて、社會の各成員を相互により密接に結合せしめる上に役立つたことを指摘し、また社會は完成した人間の出現と共にあらはれた要素であることを指摘してゐる。従つて生産關係は元來、自然への人間の祖先の働きかけ、勞働の過程において自生的に形成され、勞働生産力の發展につれてそれに照應して發展したものであつて、決して最初互ひに孤立して生活してゐた諸個人が或る天氣晴朗な日に契約を結んで形造つたといふやうな關係ではない。生産關係の發生といふことは、社會の出現、人間の出現、人間の動物的祖先の人間への轉化といふことの反面であり、それは目的意識を原因に持つのでなく自生的になされたものである。だから生産關係は人間と人間の關係であるにかかはら



ず、人間がそれを意識すると否とにかかはりなく客觀的に存在する實在である。

例へば工場で働く賃銀労働者は、相互に、且つ資本家に對して一定の生産關係にある。また彼等と、彼等の工場で生産的に消費される生産手段を製造する労働者との間にも生産關係が存在する。更に彼等が自己の労働力の再生産のためにその賃銀で生活資料を買ふとすれば、彼等はその販賣者と、從つて後者を通してこの種の商品を生産する労働者と、一定の生産關係に入るわけである。そして彼等すべては、生産手段を所有せず、自己の労働力を生産手段の獨占者たる資本家に賣つて生活せねばならず、それ故生産において隷屬的地位、*ausbeuten* される地位に置かれるといふ共通點を持ち、この共通點の故に一つの特種な階級を構成する。ところでその際、労働者は彼等を捲き込んでゐるこれらの生産關係の網をいつも意識してゐるのではないし、またあれこれの労働者は彼と資本家との間の生産關係を意識しても、必ずしもこの關係の本質を認識しない、即ちこの生産關係について必ずしも適應的な認識を有しない。それにもかかはらず生産關係は存在する。だからM・アドラーや、カウツキーや、ルービンの如く生産關係を精神的關係、心理的關係、意志關係等々として規定することは誤謬である。

生産關係は物質的なものである。といつても、もちろんそれは自然と等置される物質的實在ではない。辯證法的唯物論は各種の運動形態の特殊性を把握することを要求する。だから、ブハーリンが生産關係の觀念論的、心理主義的解釋に反對して、「生産關係なるものを、私は空間および時間のうちにおける人々（「生ける機械」と見られるところの）の労働上の配列と解釋する。これらの關係の體系は、惑星並びにその太陽と同じ程度に『心理的』である」と斷定してゐるのは（註）、社會的なもの、歴史的なものとしての生産關係の質的特殊性を抹殺する機械論的誤謬であり、



俗流唯物論の見解である。生産關係の物質性は、その時間・空間的存在を本質とするのでなく、この關係を形作るところの人々がそれを欲し、又は意識すると否とに拘りなく、本來的には彼等の「意志から獨立」に、自生的に形成され、客觀的に存在するといふ點にある。で、それは決して人間が意識を以つて活動するといふことを排除しない。だがこの意識なるものは各人が自己の活動の方向付けのために持つものであるから、必ずしも生産關係の意識ではないし、況やその適應的認識ではないのである。だから生産關係は人間の意志と意志の間に、即ち各人の意識の中に存在する觀念的な關係ではなく、客觀的實在であり、前に述べたやうに、一般に人間の活動には意識的動機があるといふ意味で意識はこの客觀的實在の一契機をなしてゐるにすぎない。それは例へば人間や一般に動物は意識、心理を持つてゐても、それは彼等の肉體的生活の一要素たるにすぎず、彼等は依然として自然界、物質世界の一員であるのと同様である。

(註) プハーリン「唯物史觀」白揚社版五五五頁

マルクスが「必然的な、人間の意志から獨立な、關係」として規定した生産關係の物質性は、レーニンによつて次のやうに説明される。

「社會的存在と社會的意識は同一ではない、それは存在一般と意識一般が同一でないのと全く同様である。人々が交通に入るに當つて、意識ある存在者として交通に入るといふことから、社會的意識が社會的存在と同一であるといふことは決して歸結されない。人々は、いくらかでも複雑なすべての社會構成においては、——また特に資本主義的社會構成においては、——交通に入るに當つて、その際如何なる社會的關係が生成され、それが如何なる法則によ



つて發展するか、等々を意識しない。例へば農民は、穀物を賣るとき、世界市場における世界の穀物生産者達と「交通」に入るのだが、彼はこのことを意識せず、如何なる社會的關係が交換から生成されるかといふことをも意識しない。社會的意識は社會的存在を反映する——この點にマルクスの學説は成立する。反映は反映されるものの近似的に正確な模像でありうる、だがここで同一性を云々するのは不條理である。」

「唯物論は總じて人類の意識、感覺、經驗等々から獨立な客觀的實在的存在（物質）を認める。史的唯物論は社會的存在を人類の社會的意識から獨立なものと認める。どちらの場合にも意識はただ存在の反映にすぎない、高々その近似的に正確な（適應的な、觀念上正確な）反映にすぎない」（註）。

（註）「唯物論と經驗批判論」第六章第二節

この長い引用句において、生産關係の物質性は充分明確に説明されてゐる。レーニンは、これらの言葉をもつて、社會的意識と社會的存在の同一性を主張したボグダーノフを反駁したのである。

彼はまた生産關係を物質的な社會的關係としてイデオロギイ的な社會的關係から區別し、この區別の中に史的唯物論の根本原理が横はつてゐることを強調する。「彼等（マルクスとエンゲルス——筆者）の根本概念は、社會的關係が物質的なそれとイデオロギイ的なそれに分れるといふ點にあつた。後者は、人間の意志や意識から獨立に、人間の生存の維持に向けられた活動の形式（結果）として生成されるところの前者の上に立つ上層建築たるにすぎない」。彼によれば、イデオロギイ的な社會的關係とは、その生成に先立つて人々の意識（無論ここで云つてゐるのは「外ならぬ『社會的關係』の意識」のことだ、とレーニンは斷り書きしてゐる）を通過してくるところの關係、一口でいへ



ば人々によつて意識的に定立される社會的關係（政治的・法制的關係）であり、物質的な社會的關係とは人々の意識（嚴密には社會的關係についての意識）を通過しないで形成される社會的生產關係の謂ひである（註）。社會科學はイデオロギー的な社會的關係に捕はれて、その基礎に物質的な社會的關係としての生產關係を發見しなかつた間は、種々の社會現象の單なる記載や材料の蒐集以上に進み得かつた。物質的なものとしての生產關係を多様な社會的關係の中から、その基礎として取り出すことによつて、初めて社會過程の反覆性、合法則性、「自然必然性」を把握し得る眞實の社會科學、唯物論的社會科學——唯物史觀およびそれに依據する社會諸科學——の可能性が與へられた。

（註）「人民の友とは何ぞや」第一部

生產關係の物質性は、それが人間と自然との間の物質代謝の社會的條件であり、この過程の物質的内容を成す生産力の運動の社會的形式であるといふ事實に基いてゐる。だからルービンにおける如く、生產關係は生産力から切離されるときには、必然的に非物質的なものと見做されることになる。だからまた、生產關係が意識的、計畫的に定立されるやうな人類史の將來の段階においても、生產關係がそれについての意識に先行し、その前提となり、それを規定するといふ事實は變化しない。將に實現されようとする新しい生產關係の體系が人々の意識の中に計畫として表象されるとすれば、かかる表象は現存する生產關係の客觀的發展の豫後として、この現存する關係によつてその内容を規定されてゐるものである。

生産關係  
の歴史性

すでに何へんも述べたやうに、各々の生産關係は歴史的なものであつて、その總體において一定の歴史的發展段階にある社會經濟的構成を成すものである。如何なる社會構成内の生産關係を取つて見ても、



超歴史的なもの、あらゆる歴史的時代に存在する關係は見出されない。あらゆる生産關係には一定の歴史的段階上の社會の質が、つまり歴史性が刻印されてゐる。

だから生産關係を規定する最も決定的な契機を技術に求めることは誤謬である。この見解は次のやうな議論に依據する。即ち、技術によつて企業内における生産過程の直接的參加者間の生産關係、労働組織が規定され、そしてこの労働組織、分業關係が階級的生産關係——階級關係としての生産關係——を規定するといふのである。この種の見解はブハーリンによつて代表された。

「技術はまた労働者の型をも、その労働能力をも、従つてまた労働諸關係をも、生産諸關係をも均しく決定した」(註一)。ブハーリンはかやうな、技術によつて直接に規定される生産關係を、種々の生産關係の中の「一部分」なりとし、それに対してもう一つの部分として階級的生産關係を指摘し、この兩者の聯關を次のやうに設定する。「そこで次の問題が起る。生産諸關係は社會的技術と共に變化することは、吾々のさきに見たところである。この命題は、同時に階級諸關係をなすところのかの生産諸關係にも當てはまるだらうか？ この命題がそれにも當てはまることを知るためには、何れかの社會の現實の發展道程を見るだけで充分である。」續いて彼は例として、機械の發達につれて大生産、工場組織が起り、それと共にプロレタリアートと産業ブルジョアジーが發生し、手工業者が消滅したことを指示し、「かくて階級成層は別なものとなつた。勿論、さうなる外はなかつたのである。何故なら、技術が變化すれば社會における分業もまた變化するからである、即ち或る種の生産機能は消滅するか退化するかして、新しい機能が次から次に起るからである。それと同時に、諸階級の編成がまた變化する」と結論する(註二)。



先きにも説明したやうに、技術の水準はそれに照應する労働者の技能を制約し、一定の歴史的発展段階にある社會は一定の技術的發展水準を前提とするとはいへ、あれこれの社會經濟的構成の歴史的に規定された特殊な質の決定的な特徴付けは、労働者と生産手段の結合の様式であり、それ故また労働力の所有者達の社會的地位である。そしてこれは生産手段の分配によつて規定される。生産手段の分配は、所有關係として法律的に言ひ表はされるところの生産關係、階級社會における階級的生産關係の基礎を表現するものである。「分配は生産物の分配である前に、先づ(一)生産手段の分配であり、次には(二)——これは前者の關係の一步進んだ規定であるが——各種の生産に向つての、社會成員の分配(一定の生産關係に諸個人を配屬させること)である。生産物の分配は言ふまでもなくこの生産過程そのものの内部に含まれて生産の組織を規定するところの、分配の結果である。この生産の中に包含される分配から切離して生産を見るのは、明かに空虚な抽象である」(註)。生産力が生産關係を規定するのは、生産手段の分配を媒介としてである。その際この分配の仕方は生産そのものの歴史的発展状態によつて、生産力の發展水準によつて規定されるのであつて、決してそこでケヴ、ルトが第一の役割を演じるのではない。分配は生産の形式的要因として、生産そのものに含まれ、そして生産力が新しい發展水準に達すると共にそれに應じて生産手段の分配の上にも變化が生じてくる。故に各々の時代の生産を取つてみるならば、生産手段の分配はその「自然的前提」としてあらはれるが、それは同時に先行する時代の生産の「歴史的結果」である。だからあらゆる一定の社會構成における生産の考察に當



つて生産手段の分配を不問に附してはならぬといふことは、何ら分配が生産に對して基本的であるといふことを意味しない。分配は、消費や、商品生産における交換と同様に生産の形式的要因として、それに含まれ、それによつて規定される。斯く生産に含まれる要因だからこそ、それは如何なる歴史的時代の生産の考察に當つてもつねに念頭に置かるべき一要件たるを失はないのである。

(註) 「經濟學批判」序説

このやうにして今や、生産手段の分配を捨象して、生産、從つてその技術的過程、労働組織を考察することが如何に不合理であるかが明瞭となる。然るにブハーリンは先づ技術によつて直接に規定されるといふところの生産關係なるものを設定し、次にこの基礎の上に階級的生産關係を定立する。そこで彼の見解によれば、「労働關係」、労働組織は階級社會において階級的關係以前のものだといふことになる。労働組織の歴史性、社會的質を抹殺するこのやうな自然主義的見解は、階級的生産關係の歴史性をも正しく理解せしめない。生産力を労働手段と同一視した大森氏が労働手段が生産關係を規定するといふときにも、既に生産關係の歴史性は全く無視される。

生産關係の規定において最重要の指標は技術でなくて生産手段の分配である。これによつて労働者と生産手段の關係は規定されるから、企業内における労働組織もまた必然的に生産手段の分配の如何によつて、所有關係によつて制約される。例へば吾々はすでにマニユファクチュアにおける労働組織がツンフトと同じ手工業的な技術を基礎としながらも、しかも資本主義的生産關係によつて貫かれてゐることを見た。マニユファクチュアは労働手段の發達、技術的改良から出發しないで、「集團的労働力」から出發した。そしてこのことは、一方に生産手段を失つた多數労働者



が存在し、他方に生産手段を自己の手に集中せしめてゐる資本家が存在すること、生産手段のかかる分配、を前提とするものである。そこでマニユファクチュアの労働組織は労働者をして餘剩價值を生産せしめるための組織として、資本主義的生産關係によつてびんからきりまで浸透される。

この場合、技術が生産關係を規定するといふならば、第一に、何故にマニユファクチュアに表現される資本主義的生産關係が在來の手工業的技術の基礎の上に發生したかを合理的に説明することは出来ない（だからブハーリンが自己の命題の例解に當つてツンフト的手工業の次に直ぐ「機械技術」を持つて來たのは偶然でない）。第二に、マニユファクチュアの労働組織を奴隸經濟等において行はれる協業と區別して、前者は分業に基く協業、後者は單純協業だと規定することは出来ても、兩者の社會的質の相異、兩者の中に表現される社會構成の相異を捉へることは出来ない。これを現代に適用していへば、何故に技術的に後れたロシアに「十月」が可能であつたかを理解し、最も進んだ資本主義諸國の技術を取り入れ、それに基づいて組織されたソヴェートの労働組織とそれらの資本主義諸國の労働組織との相異、兩者の中にあはれてゐる階級的生産關係の相異を把握することは出来ない。單に技術によつて規定される労働組織なるものが階級的生産關係を規定するのではなく、却つて階級的生産關係が一定の技術に基く労働組織を制約し、それに反映するのである。技術から出發して一般に生産關係の歴史性、特に企業内の直接的な生産關係、労働組織の歴史性、社會的質を把握することは出来ない。

ブハーリンのいはゆる「組織された資本主義」の理論は、労働組織、企業内又は企業結合内における分業、労働關係をば基本的な生産關係と見做す立場に立つて、ここにおいてなされる生産の計畫性、「組織性」といふ事實から、



資本主義下における市場の盲目性の支配の消滅、資本主義的生産の全國民的規模における計畫化を結論するものであつて、そこでは明かに資本主義的生産のアンキーがその直接的な労働關係に基いてゐるのでなく、階級的生産關係の中に最深の根據をもつてゐるといふことが忘れられてゐる。

生産は分配・交換・消費およびこれらのものに對立するものとしての生産を自己の要因として内包するのだから、交換關係も直接的生産者間の關係と同様に生産關係の中に含まれ、同じく歴史的に規定された社會構成の特殊な質によつて着色される、即ち一定の質の所有關係によつて、その要素として、浸透され、包攝される。それ自身「生産の歴史的結果」であると同時に、「生産の組織を規定」し、所有關係としての生産關係の形成における本質的な要素となるところの生産手段の分配關係から歸結される生産物の分配關係や、社會的財貨の消費關係も、やはり生産關係の要素として、それに包含され、それによつて規定され、これらの關係のうちにも所有關係としての生産關係が實現される。それで、これらすべての關係を所有關係としての生産關係、階級社會における階級的生産關係、階級關係から切離したり、相互に孤立せしめたりすることは許されない。ルービンが生産關係の觀念論的解釋に陥つたのは、生産關係の基本的形態を交換關係と見做し、それをその物質的基礎たる直接的生産の過程から切離したからであつた(註)。

(註) ルービンの批判についてはアベズガウス、ドウコール共著「經濟學方法論」(邦譯本)参照

このやうに生産關係は種々の契機を含有し、それらの契機はそれ自身また生産關係としてあらはれるのであるが、一切の生産關係の歴史的に特殊な被規定性、社會的質を規定する特徴的なものは所有關係としての生産關係である。だが、後者の意義を強調するために、労働組織や交換關係を生産關係でないと云ふのは間違ひである。人間が「共働



し、また彼等の活動を相互に交換する」(マルクス) ために入り込むところの關係として特徴づけられる生産關係から労働組織を除いたり、亦「人々は生産物を交換するとき生産關係に入る」(レーニン) といふのに、交換關係を生産關係と別個のものに見做したりすることは明かに不合理である。生産關係の歴史性を強調するために、それをひとえに所有關係として規定し、例へば労働過程における直接的生産者相互の關係、労働組織を生産關係の範圍外に置くならば、却つてこの労働組織の歴史的、社會的、階級的被制約性は捨象されることとなる(註)。問題はさういふことではなく、生産、分配、交換を自らの中に包括するものとしての生産の必要條件となるところの人間々の社會的關係を總て生産關係として把握し、その全體を一貫する歴史的、社會的、階級的被規定性を所有關係としての生産關係の光に照らして解明することではなければならない。かくして初めて吾々は、例へば資本主義的生産の下における労働組織の中に、生産物の分配關係の中に、交換關係の中に、消費關係の中にあらはれ、貫いてゐる階級的アンタゴニズム(技術的改良による労働者の状態の悪化、少数者の手への富の集中・集積、市場の盲目性、多数者の半饑餓的生存と少数者の豪奢等々)を正しく理解することが出来る。

(註) 例へば前記アベズガウス、ドゥーコルの著書においては、フーリンに反對するために、技術的關係は生産關係と質的に異つたものと規定されてゐる。

歴史的に相繼起する各々の社會經濟的構成が、従つてそれを形成する生産關係が、互ひに異つた歴史的發展段階にある社會、互ひに質的に異つた構造の人間社會、として把握されるのは、正に所有關係を規準としてである。かかる觀點から原始共產制は生産手段の共同體的所有をもつて、奴隸制は生産手段および労働者に對する少数者の私有をも



つて、封建制は農業の最重要生産手段たる土地に對する領主的・地主的私有による、土地なき大多數耕作農民の隸屬状態をもつて、資本主義は資本家によるあらゆる生産手段のモノポル、従つてあらゆる生産手段を缺くが故に勞働力の販賣以外に生計の途を持たない勞働者の存在をもつて、基本的な徴表とするものとして、識別されるのである。かくてこれらすべての社會構成そのもの、それを形成するすべての生産關係は、かかる所有關係の特質によつて特徴づけられる。

生産力と生産關係の交互作用

生産力が歴史的範疇であるのは、正にそれがかやうに歴史的に規定された所有關係・生産關係の體系を自己の運動の形式として、それに不可分に結びつき、この所有關係としての生産關係の體系内において一定の仕方で運動するが故である。つまりそれは所有關係の側から歴史的被制約性の刻印を押されるものである。生産力はただその諸要素の結合においてのみ現實的な生産力であるが、生産力の客觀的要因たる生産手段と主觀的要因たる勞働力との結合様式——生産様式——は歴史的に特殊なものであり、そしてこの歴史的被制約性は生産關係を前提とするといふことについては先きに言及した。今や、生産關係こそが生産力の歴史性を制約するものであることが明かとなつた。

ところで所有關係は生産手段の分配關係であり、後者は各々の與へられた歴史的瞬間において生産力の運動なる生産の「自然的前提」としてあらはれる。と、同時に、それがかかる性質のものとしてあらはれるのは、正にそれが先行する生産の「歴史的結果」、即ち生産力の發展の結果なるが故である。このことは取りも直さず、生産力の運動の社會的形式として、生産力に歴史的被制約性、社會的質を刻印づけるところの一定の生産關係は、根元的には生産力



の發展の結果であり、従つて生産力の一定の發展水準によつて規定され、それに照應するといふことを意味する。

一方において、生産力は基本的であり、生産關係の變化の根柢には生産力の發展が横はる。他方においては、正にその理由によつて、生産關係は各々の與へられた歴史的瞬間において生産力の運動の自然的前提として、それを制約し、この運動における歴史的に規定された特殊な合法則性を制約するものである。ここからして、生産關係によつて制約される、この歴史的に特殊な合法則性を外にして、生産力の發展——再生産——を考察することは意味を有しないといふことが結論される。

従つて生産力の發展の原因を、生産關係から切離して設定することは甚だしい誤謬である。それでは各々の社會構成に固有な生産力の發展法則、即ち生産・再生産の合法則性を把握することは不可能となる。この意味で、カウツキのやうに生産力の發展の原因を知識の進歩に求めたり、地理的唯物論や一般に自然主義のやうに自然との關係の中に求めるのは正しくない。もちろん、自然に對する働きかけ、自然との間の物質代謝なくしては人間は生産し得ず、社會發展もありえない。だが肝要なことは、「人間生活の永久的自然條件」としての労働過程は、ただその歴史的に特殊な形式においてのみ現實の労働過程であり、それ故この過程における生産力の運動はつねに歴史的に制約された特殊な合法則性に従ひ、歴史的に特殊な原因によつて動機づけられる、といふことである。總じて生産力の發展の原因が生産關係の外に在るものと見るならば、何故に封建制の下では生産力の發展は緩漫であつたか、何故に上向的發展期の資本主義は生産力を上昇させ、これに反し下向的發展期——帝國主義時代——のそれは生産力の發展を相對的に停滯せしめてゐるか等々といふ問題に答へることは出来ない。かやうに、自然への社會の「適應」、自然と社會の



關係から生産力の發展を説明しようとする場合には、相對的に不變な自然的條件の下における歴史的發展や特にそのテムポの不同を説明することができない。例へばわが國の自然的條件が古代と同じであるにかかはらず、何故に永い「アジア的」停滯の後に明治時代に入つて急激に、畸形的ながらも資本主義的發展の途に就いたかといふことを説明し得ないだらう。自然主義は知識の進歩や欲望一般の増進から生産力の發展を説明する俗流的唯心史觀の反對の極であり、それを裏返したものである。しかもこの兩者が屢々共棲するものであることはカウツキーの例が示してゐる。生産力の發展の推動力は觀念的なものや自然的なものではなく、客觀的、物質的にして而かも社會的な事實の中に見出される筈のものである。

生産力と生産關係の矛盾が社會發展、從つて生産力そのものおよび生産關係そのものの發展の最後の根據であることは唯物史觀の根本原則である。そして生産力が生産關係との矛盾によつて發展するといふことは、すでに、生産力にはつねにその運動の社會的形式たる生産關係の側から刻印される歴史的に制約された發展法則が内在するといふことを意味する。で、生産關係が生産力に照應するといふことは、兩者の間に矛盾が存在しないといふことではない。生産力の一定の發展水準にあれこれの生産關係が照應する、又は照應しない、といふことは、該生産關係がその中で運動してゐる生産力の一層の前進を助成する契機であるとか、又はその桎梏となつてゐるといふ關係を言ひ表はしたもので、生産力と生産關係の矛盾の二つの様相を指して言つたものに外ならない。生産力および生産關係の發展、一般に社會進歩のあるところには兩者の矛盾がつねに現存し、そしてこの發展の基本的動力となる。その際注意すべきことは、矛盾は階級社會においてはアンタゴニズムの形態をとるが、生産力と生産關係の矛盾は一般に、人間々のアン



タゴニズムの中に表現されねばならぬといふが如きものではない、といふことである。「アンタゴニズムと矛盾は決して同一のものでない。ソシヤリズムの下では前者は消滅し、後者は残る」(註)。要するに、アンタゴニズムは生産力と生産關係の矛盾の一定の特殊な歴史的形態であつて、その一般的形態ではない。アンタゴニズムのない所でも生産力と生産關係の矛盾はつねに人類生活の歴史的発展の發條である。

(註) レーニン「ブハーリン轉形期經濟學への評註」

生産力の發展が各々の歴史的社會構成において異つた合法則性、異つた推動力によつて行はれるといふこと、云ひかへれば生産力と生産關係の矛盾は各々の歴史的時代において特殊な形態をとるといふことは、例へば資本主義の場合を見れば直ちに明白となる。

資本主義の凡ゆる矛盾の萌芽は、多數労働者の分業Ⅱ協業による社會的生產(かかる高度な生産力の發展水準)と資本主義的所有關係の間の矛盾であり、それがブルジョアジーとプロレタリアートの間の矛盾および個々の工場における生産の組織化と全社會における生産のアンキーの間の矛盾として表現され、再生産されるといふことは先きに述べた通りである。そこで、技術發展の條件について語つた際にも觸れた様に、上昇期のブルジョア達は、プロレタリアに對する生産過程内における自己の權力を増大せしめるために、就中またブルジョア相互の自由競争から勝者として出てくるために、技術を改良し、生産を擴張しなければならぬ。「社會的な生産アンキーを推動力として、大工業の機械の無限の改良可能性は、個々の資本家にとつて、没落を免れるためには彼の機械をますます改良せよ、といふ強制命令に轉化する」(エンゲルス)。そして機械の改良こそは労働者の隸屬をますます強化する條件となるので



ある(註一)。マルクスも、資本主義的生産力の發展における自由競争の役割について次の如く説明してゐる。「資本主義的生産の發展は一つの企業に投下された資本の不斷の増嵩を必然性たらしめ、そして競争は資本主義的生産様式の内在的法則を外的強制的法則として各々の個別的資本家に押しつける。それは彼を強ひて、彼の資本を維持するためにそれを不斷に擴張させる。そして彼はただ累進的蓄積によつてのみ資本を擴張し得るのである」(註二)。このやうにして資本主義的生産においては擴張再生産——資本の蓄積——が必然的であり、それによつて生産力も生産關係も、従つて兩者の矛盾もますます擴張的に再生産される。生産力の發展はここでは機械の改良、それに関連してますます多くの自然的富源の開發、擴張再生産に要する労働者數の擴張再生産(多數人口のプロレタリア化による)の中に表現され、しかもこの發展において資本家と労働者の間、並びに資本家の手にある技術と労働者の間のアンタゴニズムも擴張的に再生産される。

(註一) 「反デューリング論」第三篇第二章

(註二) 「資本論」第一卷第二十二章

だが資本家相互の自由競争の結果、弱小なものが倒れて強者が残るとすれば、後者の手には社會的富がますます集中・集積し、更にそれが擴張的に再生産され、そしてかやうな過程そのものが擴張的に反覆、再生産されて、資本主義は獨占の段階に入り込む。この段階においてはすでに技術進歩において停滯的傾向があらはれ、同時に全體としての労働者階級はますますミゼラブルな生活條件の下に置かれることとなる。獨占資本主義の時代の所有關係の下においては、技術の發展が相對的に停滯するばかりでなく、生産力の最重要な要素たる労働力は直接的生産過程の圏外に



大量的に締め出される（産業豫備軍として）。特にその一般的クリーゼの時代には、現存する生産設備・技術さへも慢性的に長期にわたつてその何パーセントかは休止状態に置かれ、未曾有の大量の労働力が生産に利用されずに無駄にされ、荒廢に委ねられてゐる。云ひかへれば生産力の發展は獨占資本主義、就中その現段階においてはすでに阻止され、生産關係は生産力の桎梏となり、それとコンフリクトするに至つてゐる。

資本主義的生産力の發展におけるこのやうな事實は、資本家の意志から獨立な資本主義的生産關係・所有關係によつて制約されてゐるものである。資本家の利殖慾は資本主義的生産の本質の觀念的反映に外ならず、資本家は「人格化された資本」（マルクス）に外ならない。生産・再生産、生産力の運動は資本家の意志から獨立な、客觀的に存在する歴史的に特殊な合法則性に從つて遂行されるのである。

かくて吾々は、資本主義的生産關係は生産力の發展の歴史的結果として、社會的生産の組織に迄到達した生産力の發展水準によつて規定されてゐ乍らも、それに照應するものとして生産力の發展法則の歴史的に特殊な質を制約し、生産力の一層の前進の促進要素となつたといふこと、だがこの生産關係を社會的條件として生産力が或る程度に迄發展するや、生産關係にもそれに應じて新しい特徴——獨占——が從來の特徴の基礎の上に、且つ後者と並んで、發展し、それと共に生産關係は生産力の發展の桎梏に轉化したといふこと、を明白に見る。

かくて亦、社會發展の基礎を社會の自然との間の外的均衡、前者の後者に對する「適應」の中に見出したブハリーンが、生産力の運動、再生産を生産關係から切離し、如何なる具體的な歴史的な特殊法則をも捨象した空虚な再生産、原因を捨象した再生産の外形、を叙述してゐるといふことも偶然でないのを知ることが出来る。「いま、何らかの原



因、の、た、め、に、同、一、量、の、必、要、生、産、物、が、全、勞、働、時、間、を、費、さ、さ、ず、と、も、た、だ、そ、の、半、分、を、費、し、た、だ、け、で、獲、ら、れ、る、や、う、に、な、つ、た、と、假、定、す、る。……さ、う、な、ら、な、ら、ば、こ、の、社、會、で、は、以、前、の、勞、働、時、間、の、丁、度、半、分、だ、け、が、解、放、さ、れ、る。そ、こ、で、こ、の、社、會、は、解、放、さ、れ、た、時、間、を、新、た、な、生、産、部、門、に、即、ち、新、た、な、道、具、の、製、出、新、た、な、原、料、の、獲、得、等、々、に、そ、し、て、次、に、若、干、の、種、類、の、「精、神、的、勞、働」に、費、す、こ、と、が、出、來、る」(註一)。ブ、ハ、ー、リ、ン、の、こ、れ、ら、の、言、葉、に、お、い、て、生、産、力、の、發、展、擴、張、再、生、産、が、そ、の、社、會、的、條、件、——生、産、關、係、——拔、き、に、全、く、抽、象、的、に、考、察、さ、れ、て、お、い、る、と、い、ふ、こ、と、は、あ、ら、ゆ、る、社、會、構、成、に、通、有、な、再、生、産、の、形、式、を、見、出、さ、う、と、す、る、彼、の、ボ、グ、ダ、ー、ノ、フ、的、社、會、學、的、「概、念、ス、コ、ラ、學」と、結、び、つ、い、て、お、い、る、も、の、で、あ、る。か、く、て、例、へ、ば、彼、は、ソ、ヴ、ェ、ー、ト、政、權、成、立、當、初、の、「プ、ロ、レ、タ、リ、ア、ー、ト、の、當、面、す、る、課、題、は、大、體、に、お、い、て、形、式、上、で、は、即、ち、過、程、の、社、會、的、内、容、か、ら、獨、立、に、こ、れ、を、み、れ、ば、擴、張、さ、れ、た、否、定、的、再、生、産、の、際、に、お、け、る、ブ、ル、ジ、ョ、ア、ジ、ト、に、と、つ、て、と、同、一、で、あ、る、即、ち、す、べ、て、の、資、源、を、節、約、し、そ、れ、を、計、畫、的、に、利、用、し、可、能、な、る、集、中、を、最、大、限、に、す、る、こ、と、で、あ、る」(註二)抔、と、云、つ、て、二、つ、の、社、會、構、成、經、濟、體、系、に、お、け、る、再、生、産、の、法、則、の、中、に、形、式、上、同、一、な、内、容、を、見、出、し、非、歴、史、的、な、も、の、社、會、構、成、の、質、に、對、し、て、中、立、的、な、も、の、と、し、て、の、技、術、的、過、程、を、設、定、し、よ、う、と、す、る。彼、が、こ、こ、で、荒、廢、せ、る、生、産、力、の、恢、復、に、關、す、る、ソ、ヴ、ェ、ー、ト、勞、働、者、階、級、の、任、務、を、云、爲、す、る、に、當、つ、て、生、産、關、係、の、變、更、勞、働、者、の、ベ、フ、ラ、イ、ウ、ン、グ、に、よ、つ、て、も、た、ら、さ、れ、る、新、し、い、勞、働、規、律、の、創、造、勞、働、の、昂、揚、を、全、く、念、頭、に、置、い、て、お、い、ない、こ、と、は、特、徴、的、で、あ、る。

(註一)「唯物史觀」白揚社版一八七頁(傍點は筆者)

(註二)「轉形期經濟學」(傍點はレーニンがアンダーラインした部分)

か、や、う、に、生、産、力、の、運、動、を、生、産、關、係、か、ら、切、離、し、て、考、察、す、る、見、地、は、元、來、生、産、力、の、自、働、的、成、長、の、見、地、で、あ、り、生、産、力



の發展における生産關係の役割の相對的積極性の否定の見地である。だからブハーリンがソヴェート農村における新しい生産關係の創造——コルホズ化、階級としてのクラークの清算——の積極的遂行を必要と認めず、ソシヤリズムへのクラークの自生的轉生の理論を提唱したのは故なきことではない。

然るに、生産力の運動はただ生産關係との統一、矛盾——矛盾を内包する統一——によつてのみ行はれ、この矛盾において生産關係が生産力に照應するときにはそれを前進せしめる契機となり、逆に照應しなくなつたときには生産力の發展の桎梏となり、かくて結局において廢棄されるといふことは、生産關係が生産力によつて規定されるとは云ひながら、否、正に規定されるが故にこそ、同時に生産力の運動に對して相對的に積極的な役割を演ずるものであつて、決して生産力の運動の單なる受動的結果ではないといふことに外ならない。「生産力と生産關係の概念の辯證法」(マルクス)、その限界が規定され、現實の差別を止揚しないところの辯證法こそ、史的客觀主義者の把握しえないところのものである。スハーノフやカウツキー、ヴァンダーヴェルデ等は、生産力は自働的に生長し、生産關係の變化はその單なる受動的結果であると思はす經濟的唯物論や客觀主義を史的唯物論と混同し、ロシヤにおける生産力の發展水準の低さを援用して「十月」に反對した。彼等は生産力のかかる低い發展水準を曳き上げるためには、何よりも先づそれに相應の新しい社會的條件、新しい生産關係の創出が必要だといふことを理解しなかつた。彼等は實にこの歴史の辯證法を理解しなかつた一事を以つても、辯證法的唯物論者たるの資格を失つたのである。

ところで新しい生産關係の創出はやはりそれに必要な生産力の一定の成熟を前提とする。低い生産力水準の上に高度の生産關係をやたらに造出すことは許されない。だがここで最も重要なことは、或る國における生産力が一定の新



しい生産關係の實現を可能ならしめる迄に生長してゐるかどうかの問題は、一般に認識の眞理性の規準がプラクシスであるやうに、結局においてプラクシスの規準によつて解決されるといふことである。だから例へばその國の生産力が他國に比して相對的に低水準に在るといふことだけでは、未だ新しい生産關係の出現のための生産力の未成熟性を證明するものではない。現代社會においてはこの問題に解決を與へるものは先進的階級のプラクシスである。で、例へば、舊ロシアのやうな比較的後れた國においても、種々の一般のおよび特殊の條件の獨自な結合によつて好都合な客觀的事態が造り出され、かかるチャンスがすかさず利用されて新しい社會的關係が設定され、しかもそれが維持・發展せしめられてゆくとすれば、即ちすでにプラクシスの上でここにおいても生産力は餘りに低くはなかつたといふことが立證されるわけである。つまり、プラクシスによる檢證をまたすしては、生産力のかの成熟した水準が「如何なるものであるかは何人も語り得ないのである」。これはレーニンがスハーノフ批判において強調した注目すべき思想である。この場合プラクシスといつてもその主體はもちろん勞働力の所有者達のことであるから、かかるプラクシスにおいて初めて生産力のあるこれの水準と一定の新しい生産關係の可能性の問題が解決されるといふことは、一般に、生産力と生産關係のコンフリクトをば、生産力の發展の利益において全生産力を代表して解決するところのフィジツシユな力が勞働力の所有者達によつて提供される、といふ事實から歸結される。

生産力と生産關係の辯證法的交互作用、生産關係の相對的積極性、生産力と生産關係の交互作用における勞働力の所有者達の積極的役割——これらのものの客觀主義的歪曲は、自然主義・經濟的唯物論から來るものである。そしてそれは、唯物史觀に容易に影響し、浸透するところの、従つてそれだけに批判されねばならぬところの一大潮流をな



してゐる。

## 第四節 各種の社會經濟的構成

社會經濟的構成の一般概念

歴史は、その固有な内在的な、そして人間の意志から獨立な客觀的な發展法則に従つて發展し、この過程において、一つの社會經濟的構成は一定の生長を遂げた後、他の、新たに發生する社會經濟的構成にとつて代はられる。だから歴史においては客觀的合法則性が支配し、各種の社會構成は客觀的に實在したもので、又は現に實在するものであつて、單なる認識上の目的で構成される範疇としての「型」の如きものではなく、歴史的に相繼起する、相互に異なる實在的な型である。そして各々の同じ型の社會構成の下では同じ法則が支配し、同じ過程が反覆される。かういふ見解によつて唯物史觀は觀念論的な歴史哲學や社會學の弱點を克服する。

同時に唯物史觀は、社會經濟的構成をもつて生産關係の總體から成立するものと見做し、この生産關係の質の特徴付けを生産手段の分配によつて規定される所有關係の中に見出すものであるから、それは當然に、所有關係に従つて生産様式を捨象した生産技術上および分業上の關係を生産關係なりとする見地や、かかる關係の相異に基いて社會經濟的構成の差別、従つて歴史上の時代區分を行ふ自然主義的、機械論的見地から、區別されなければならない。この種の機械論的見解の代表者として知られてゐるのはボグダーノフとドゥプロフスキーである。ボグダーノフは社會發展の全歴史を三つの基本的な型に分ける。第一の型は「零細自然經濟」で、それは原始氏族コンミュニズム、權威制



氏族共同體、封建制に細分され、第二は交換經濟の型で、それは更に過渡的形態としての奴隸制および農奴制と、小ブルジョアの構成、家内資本主義體制、マニユファクチュア型の産業資本主義、機械制資本主義に分たれ、第三の型は合同自然經濟（コレクチヴィズム）である（ラリツェウイチ編「史的唯物論」による）。ドゥプロフスキーは「基本的生産様式」として原始社會の經濟、家父長制經濟、奴隸制經濟、農奴制經濟、小生産者の經濟、資本主義經濟、資本主義からソシヤリズムへの過渡期の經濟、ソシヤリズム經濟、世界コンミュニズム時代の經濟を列擧する。これらの分類が何ら史的唯物論における社會經濟的構成の見地に立つてゐないことは、封建制と農奴制を異る範疇としたり、奴隸制や封建制の下でも存在する商品生産を特殊な經濟時代・社會經濟的構成と見做したり、過渡期を特殊な社會構成へ獨立させたりしてゐるのを見ても明白である。

歴史上の時代區分、種々の社會經濟的構成の區分は所有關係、生産様式を指標としてなされなければならない。

だが現實の社會經濟的構成は決して「理想型」的に純粹なものではない。例へば封建社會の内部には從屬的なものとして前階級社會の生産關係や奴隸所有が残存すると共に、やがて後には資本主義的生產關係が生成する。また資本主義社會の内部には多かれ少なかれ封建社會の遺制や、また往々にして奴隸制の遺物が残存する。このやうに、一定の社會經濟的構成の質を規定する生産關係——その構成における支配的な生産關係——に從屬して、その社會構成の内部に存在する所の、舊い社會構成の遺制や、生成途上の新しい質の生産關係の體系は、ロシヤ語で特にウクラード（Ukrad）と呼ばれる。このウクラードの存在によつて社會經濟的構成は何らかのモディフィケーションを受けるとはいへ、しかしそれは單なるウクラードがその社會の發展において決定的な役割を演じるといふことを意味しない。



かかる役割を演じるところの生産關係はもはや單なるウクライドたることを止める。何となれば社會經濟的構成とは元來、他のウクライドを從屬せしめる支配的なウクライドのことだからである。

現在までの歴史上に見出される社會經濟的構成は、原始コンミューニズム、奴隸制（又は古代的構成）、封建制、資本主義およびソヴェートの構成である。これらのものについて若干の説明を加へよう。

原始コンミ  
ユニズム

これは所謂有史以前の極めて長期にわたる社會經濟的構成である。原始社會の研究はモルガンの著書「古代社會」（一八七七年）によつて一大進歩を齎らされた。エンゲルスはモルガンに依據して、原始社會の發展、原始コンミューニズムの發展を次のやうに段階付けてゐる（「家族、私有財産および國家の起源」参照）。

(A) 蒙昧 (Wild)

(一) 下期——人類の幼年期、猿に類したもものから人間への轉化の時代。

(二) 中期——魚類の食用と火の使用に始まり、磨きをかけない石器（古石器）の製出、棍棒および投槍の發明がこの時代に屬する。それと共に獸肉も時々食用にされた。

(三) 上期——弓矢の發明をもつて始まる。狩獵が正規の生業となり、磨製石器（新石器）。その他若干の道具、獨木舟等が造られ、定住の端緒があらはれる。

(B) 野蠻 (Barbary)

(一) 下期——土器の使用から始まる。

(二) 中期——東大陸では家畜の馴養、西大陸では灌溉による食用植物の栽培と石造建築をもつて始まる。これは兩大陸の自



然的條件の相異によつて制約されてゐるが、しかしやがてこの時期において東大陸にも植物栽培は起り、西大陸にも動物の馴養が始まる（メキシコ人の七面鳥、ペルー人の駱馬）。西大陸はスペイン人の征服當時までこの段階にとどまつてゐた。

(三) 上期——鐵器の製作と共に始まり、農業の進歩、道具の發達による手工業の展開、城壁を環らせた都市の發生を経て、文字の發明とその文献的記録への利用とによつて文明期に移行する。

エンゲルスはモルガンのこの區分を概括して、蒙昧は主として出來合ひの自然の産物を獲得する時代で、労働手段はこの獲得の補助手段であり、野蠻は牧畜および耕作の知識を得る時代、即ち人間の労働によつて自然物の生産を高める方法を學ぶ時代であり、次の、文明の時代は自然物の一層の加工、本來の工業および技術を學ぶ時代である、と規定した。

原始社會においては最初階級、私有財産は存在しない。一切の生産手段は共同體によつて所有される。この共同體は最初はいはゆるホルド（群團）であり、次に蒙昧の中期から氏族制が發生し、野蠻の下期において全盛時代を現出する。氏族制の發展は母權制の成立を制約した。

原始社會の所有關係・生産關係は當時の労働手段の極めて低い發展段階においては生産力の發展の強力な槓杆であつた。それは協業——勿論、單純協業——による労働生産性の上昇を制約し、生産力の發展の契機として働いた。だが生産力の發展の結果、野蠻の中期に牧畜が起り、牧人種族が出現すると共に、牧人種族と他の種族との間に氏族長を通して交換が規則的に行はれ始め、交換は更に生産力の一層の發展を促進した。このことは「人間の労働力に對して、その生計に必要なよりも大なる生産物を産出する能力を與へた。同時にそれは、氏族、世帯共同體又は單一家族



の各成員の負擔する日々の労働量を増大した。」かやうに、一方、餘剩労働の可能性と、他方、より多くの労働力に對する需要とは、奴隸の出現をもたらした。奴隸は初めは戦争の俘虜であり、後に私有財産の發展につれて負債の支拂能力なき者も奴隸に轉化した。かくてエンゲルスは牧人種族の出現をもつて「最初の大なる社會的分業」と呼び、ここに奴隸所有の根據を見出してゐる。

氏族間の交換は氏族内部における交換を發生せしめ、かくて發展した生産力は共同的生産の代りに個別的生産を可能ならしめ、それと共に氏族又は種族の財産だつた多くの生産手段は個々の家族長の所有に移される。氏族制の最初の割目を成した家父長的家族が成立し、母權的家族は消滅する。これは、婦人の労働が、主として家内労働に局限され、生産において重要性を有しなくなつたがためである。土地が共有で、その他の大多數の生産手段が家族的所有となつてゐるところの農業共同體は、かかる家父長的家族の集合である。

野蠻の上期に入ると共に、「第二の大なる分業」、即ち農業からの手工業の分離が行はれ、交換のための生産が、従つてまた商業が發展し、「富者と貧者の差別が自由人と奴隸の差別と並んであらはれる」(エンゲルス)。

その結果、氏族制は崩壊し、奴隸制的社會構成があらはれ、その基礎の上に國家が形成される。共同所有の生産關係によつてその發展を制約された生産力は、分業、交換の發展と共に、やがて舊來の生産關係と兩立しなくなり、私有關係を發展せしめ、終に原始コンミューニズムを解體させたのである。

### 奴隸制

原始社會の廢墟の上に發生した新しい社會經濟的構成は歴史上最初の階級的社會構成であり、古代國家はこれを「現實的基礎」とするものであつた。奴隸制はすでに見たやうに氏族共同體の中にウクライド



として發生したものであるが、一層の發展の結果、この共同體の殻を破つて自らを社會經濟的構成に轉化させた。それと共に今や奴隸とその主人との間のアンタゴニズムが全社會構成の基礎となる。

奴隸制は古代のギリシヤおよびローマにおいて典型的に發展した。ここでは奴隸労働は家父長的家族の労働の補足物から、生産における決定的な要素にまで發展し、奴隸所有者はもはや労働を輕蔑する完全な寄食者となつた。しかし乍ら如何なる國においても、奴隸労働が最初の *Ausbeutung* の形式だつたといふことは疑のない所である。一般に見て、古代國家の發生に當つて自らを治者階級へと編成した人々は、舊社會における富者・奴隸所有者であつた。

古代においては外ならない奴隸制が *Ausbeutung* の基本的形式であつたことは、當時の技術水準によつて説明される。低い技術水準の下では、労働過程において労働力が直接に演じる役割の比重が、技術のそれに比して著しく大きく、それだけにまた労働生産性も低い。そこで労働力は直接に他人の所有の對象となり、その再生産が不可能になる迄に労働を強制されるのである。

多數奴隸の所有者の行ふ大規模生産と、氏族制の崩壞によつて獨立した多數の家父長的家族——後には一夫一婦制の家族——の小規模な個別的生産とは互ひに矛盾し、前者は安價な労働力、強行的労働、單純協業の強味や、租税、戦争の負擔等をもつて後者を壓迫し、後者は必然的に零落する。奴隸所有者の手への餘剰生産物の大量的集積は商業を發展させ、商業は更に奴隸經濟の發展を促進する。零落した小生産者——自由な農民と手工業者——は或はルムペン團を形成したり、或は商業資本と共に發展する高利貸資本に縛られて債務奴隸となる。

奴隸制社會の基本的矛盾は奴隸所有者と奴隸の間の矛盾であり、そこから奴隸所有者と小生産者との間の矛盾が派



生ずる。奴隷労働の飽くことなき Ausbeutung を通しての小生産の壓迫と、租税その他の負擔の加重とによる一般人民の窮乏が、遂に奴隷労働の生産物のための市場を狹隘ならしめる迄になり、奴隷制がすでに利益をもたらさなくなつたとき、それは奴隷（および小生産者）の Klassenkampf に對して持ちこたへられないものとなつた。

### 封建制

普通に西ヨーロッパの封建制はローマ帝國に對する「蠻族」（ゲルマン人）の征服によつて發生したと見做される。だが實際には征服そのものは決して新しい生産様式を産出しない。征服の後に新しい生産様式が樹立されるためには、そのやうな生産様式が征服者の側か被征服者の側に豫め成長しつつあることが必要である。ローマにおいてはその末期に、奴隷所有者の大私有地（ラチフォンヂム）は奴隷の單純協業による大規模農業から小規模な耕作に移され、細分された土地は地主に對して地代を納める非自由な農民（自由農民や奴隷から轉化せるもの）によつて耕作され始めた。一言でいへば封建的土地所有、封建的生产關係が生長した。この基礎に加へて、野蠻上期にあつたゲルマン人の軍團組織がヒエラルヒ的な封建的土地所有の創出を容易ならしめた。

ローマの奴隷制は貨幣Ⅱ高利貸資本の異常な生長をもつた自然經濟であつた。ところでこの奴隷制の解體が「市場の消滅」（エンゲルス）に關聯してゐる限り、その廢墟の上に發生した封建制は、自然經濟の側への一層の後退であつた。封建制は、何處においても、自然經濟を基礎とするもので、その生産關係の核心は領主・地主の大土地所有と、農奴又は農奴的農民によるこの土地の零細耕作のうちに表現される。

奴隷制と異つて、封建制の下では直接的生産者たる農民は直接に所有されるのではなく、彼は農業要具の所有者でさへある。だがもちろんそれは彼が自由民であることを意味しない。封建制下の農民は領主・地主に直接に所有されな



いとしても、やはり後者の土地に經濟外強制をもつて括り付けられるところの非自由民である。土地への農民のこの緊縛、地主・領主への農民のこの隷屬は農奴制において典型的にあらはれる。農奴制はボグダーノフやドゥプロフスキの云ふ如く封建制と異つたもの、別な段階、別な社會經濟的構成をあらはすものでなく、封建制の諸特徴を典型的に示してゐるものに外ならない。

レーニンは資本主義に對する農奴制の特徴を次のやうに説明する。「第一に、農奴制經濟は自然經濟であり、資本主義經濟は貨幣經濟である。第二に、*Ausdeutung* の手段は農奴制經濟においては土地への勞役者の緊縛、彼への土地の割當であり、資本主義經濟においては土地からの勞役者の解放である。收入（即ち餘剩生産物）の獲得のためには、農奴所有者・地主は自己の土地上に割當地、農具、家畜を有する農民を持たなければならない。……資本家は收入（利潤）の獲得のためには、正に自由な労働市場で自己の労働力を賣らなければならないところの土地無き、馬無き、經營無き勞役者をこそ眼前に持たなければならない。第三に、土地を割當てられた農民は地主に人身的に依存しなければならぬ、何故なら土地を與へられた彼は強制による以外には徭役労働に行かないからである。ここには經濟體制は『經濟外強制』、農奴制・法律上の隷屬、權利不充分等々を産出する。反對に、『理想的』資本主義は自由市場における有産者とプロレタリアートとの契約の完全な自由である」（註）。即ち、自然經濟であること、農民が一揃ひの生産手段を所有し、地主の土地を割當てられてゐること、經濟外強制によつて農民の隷屬、地主の收取者的地位が維持されることが、封建制の特色である。

（註）「十九世紀末ロシアの農業問題」第二章



典型的な自然經濟の下では一般に家父長的家族とか、農業共同體とか、封建地主の所有地とかいふやうな、互ひに小宇宙的に獨立した經濟的單位の中で生活に必要な一切のものは生産され、商品でなくて使用價值の生産が支配的である。そこでは従つて手工業は農業から獨立せず、農民の消費する手工業生産物は農民自身によつてか、或は未だ農業から分離してゐない農村手工業者によつて生産される。併しながら生産力の發展——徐々ではあるが——と共に分業が發展し、農業に従屬してゐた手工業は漸次にそれから分離し、獨立し、それにつれて都市が農村から分離する。都市の住民を構成する主要なものは、商人、高利貸、手工業の親方、職人、徒弟、日雇労働者であり、日本の徳川封建制においては都市は多く（大阪や堺やその他若干のマニユファクチュア都市は別だが）領主とその家臣團の居住する城下に形成された。都市における手工業や商業・高利貸資本の生長は封建制に解體的作用を及ぼすものであるが、しかし未だそれだけでは、即ち商業・高利貸資本が産業資本に轉化しない限りは、封建的自然經濟を覆へすことは出來ない。封建時代の都市は未だに自然經濟が優越な農業を背景として立つてゐるものである。

従つて土地を所有する領主・地主と耕作者たる農民の關係が、封建制の基礎を、それ故にまた基礎的矛盾を成してゐる。この關係は經濟的には封建的地代の中に表現される。マルクスは封建的地代の形態として、労働地代、現物地代、貨幣地代を擧げる。何れも農民の全餘剩労働を吸収することには變りはない。だが封建制下の農民は、日本封建制の特に末期の場合のやうに自己の必要労働の分まで收取され、自己の生活の再生産さへ出來ないやうな状態に置かれたい限り、奴隸と異つて、生産性を上昇させようとする衝動を持つ。何故なら労働地代の場合なら自己の割當地における労働の強化によつて、また一定の率又は一定額の現物地代や貨幣地代の場合ならば全收穫高の増加によつて、



彼は富み得るからである。だが他面において、領主の收取と小規模經營は封建時代における農業生産力の發展を阻止する有力な要因として作用した。

貨幣地代は商品生産の發展を前提とし、またこのやうな貨幣關係の發展は耕作農民の間から農業資本家の發生を可能ならしめる。といつても、貨幣地代そのものは何ら資本主義的農業の發生の必然性を與へない。特に日本において明治政府がやつたやうに、工業部面に投じられる資本の原始的蓄積の目的で、必要労働の生産物の一部分まで喰ひ込んで現物地代の一部分が地租の名において貨幣化されるが如き場合には、耕作農民の間から資本主義的農業經營者が出て來ないことは勿論である。

地主に地代の取得を保證するものは封建的政治體制によつて保證される經濟外強制である。簡單にいへば經濟外強制は封建的治者階級の武装勢力に支へられてゐるものである。だから地代の引下げはただ農民の鬭争の結果としてのみもたらされた。ところで封建的治者階級の内部的編成はヒエラルヒーの原理によつてゐて、各地主の勢力は彼等の所有する土地の大小——或ひは農奴數の多少——によつて規定され、小なる地主はより大なる地主に臣従して自己の地位を保證し、後者は更に大なる地主に隸屬する。封建的モナルヒー——例へば日本の幕府——は封建時代の最大の土地所有者である。日本では戰國時代の強食弱肉の過程において、農村の自己の領地に居住してゐた多數の地主・土豪は或は大土豪に倒され、後に藩主となつた後者に隸従して、その家臣となり、知行所を離れ、城下に定住するか、或は藩主に服従して郷士として農村に存在するか、或は百姓の列に落されることとなつた。そこで農民は多くの場合幕府および幕府を頭に戴く藩主・巨大土地所有者（大名、小名、陪臣等）に直接に支配され、後者はその家臣團の老



大な武装勢力をもつて、商業Ⅱ高利貸資本の生長と共に益々増大する收取を強行したのであつた。かかる收取、かかる Ausbeutung が如何に農民の生活そのものの再生産をも不可能ならしめたかは、特に徳川時代の後期に普遍的現象となつた逃散、凶荒による餓死、農民一揆等々がこれを示してゐる。

封建制の基本的な矛盾は階級的には地主・領主と農民との間のそれであるから、封建制の解體において基本的に重要な意義を持つのは農民の闘争である。ところで封建的土地所有の清掃は農奴的農民を自由な獨立小農民に轉化させるといふ意味で、ブルジョア民主主義の實現を意味する。しかしブルジョア的秩序の樹立はブルジョアの一定の生長を前提とするものであるから、農民は單獨では封建制を打倒し得ないものである。それにしても、ブルジョア民主主義がどれだけ徹底するかといふことは、この運動において物理的力の供給者となる農民と都市労働者がどれだけ積極的に活動したかによつて規定されるといふことを銘記しなければならぬ。

x

x

x

前資本主義的な階級的社會構成は以上述べた奴隸制的構成と封建的構成に限られる。ところでマルクスが諸所でアジア的生產様式といふ言葉を使つてゐるところから、このアジア的とは何を意味するか、それは如何なる社會構成の特徴を意味するかといふことが問題となつてゐる。アジア的生產様式を奴隸制および封建的構成と別箇な、それと並立する獨立な社會經濟的構成と見做すことの誤謬は充分に明白である。何故ならアジアの歴史も奴隸制および封建制以外の階級的社會構成の存在を示さないからである。尤も、奴隸制がアジア諸國で單なるウクライドから社會構成にまで發展し、古代國家の基礎となつたといふことは未だ具體的研究によつて證明されてゐない。だが同時に、アジ



ア諸國の古代的社會構成をば奴隸制を副次的なものとする封建的構成と斷定し去る見解も無論公認的なものとなつてゐない。だが何れにしても、奴隸制が階級的アンタゴニズムの最初の形態であつたといふことはアジアにおいても變りはない。マルクス、エンゲルスは、西ヨーロッパの資本主義侵入以前の支那やインドについて、家父長的家族の勞働の補足物たる段階における奴隸所有がギリシヤやローマのやうに尨大な數の奴隸の協業による大生産のために驅逐されるに至らないで繁榮したことを、従つて家父長的家族形態が止揚せられず、それに關聯して家父長的家族を構成單位とする農業共同體が長く殘存したことを指摘し、アジア諸國における生産力の發展の停滯性やその特徴的な專制的政治形態の經濟的構造上の基礎をここに見出した。このやうな特徴は、無論、特殊な社會經濟的構成を成立せしめな

い。農業共同體は野蠻中期に發生し、氏族制の解體後に普遍的なものとなつた家父長的家族と不可分のもので、それは到る所において、程度の相異や期間の相異こそあれ、古代社會にも封建社會にも殘存した。だからそれは特殊な社會構成であり得ず、アジア諸國におけるその強固な殘存は、ただそれらの諸國の前資本主義的な階級的社會構成に若干の特徴、ニュアンスを賦與したにすぎない、といふべきであらう。アジア的生產様式なるものは、このやうな意味に理解さるべきであらう(註)。

(註) 尙ほこの問題に關する種々の意見とその検討については相川春喜氏「歴史科學の方法論」第二篇参照

資本主義
------

封建社會において、商品生産が發展するにつれて、資本主義的生產關係がその中にウクライドとして形成され、それは一定の程度まで發展するや、封建制を没落せしめて新たな社會經濟的構成に飛躍的に轉化する。



資本主義的生産は生産手段の所有者と生産手段無き労働者の存在を前提とするもので、その發生は、商品生産が勞動力をも商品たらしめるといふ段階にまで到達するとき可能となる。資本主義に特有な社會的生産は、一人の資本家の所有する生産手段をもつて、多數の賃銀労働者が生産に従事するといふことにおいて成立するのである。

資本主義的生産は初め商業資本の支配下にある手工業から發生する。その發展の第一段階は小商品生産Ⅱ小工業であり、第二段階はマニユファクチュアであり、第三段階は大工業である。

第一段階たる小工業の萌芽は「家族的協業」であるが、それは資本主義的なものとしては勿論賃銀労働者を前提とする。従つて封建的に統制された都市手工業が嚴重なツンフト規則に縛られてゐるところでは、賃労働に基く手工業は最初はむしろ農村において發生する。ところで農民の商品生産は小規模であり散在的であるために、原料の買入れや製品の販賣において特殊な便宜を有する商人・買占人に依存する。この依存には、買占人が小商品生産者の製品を獨占的に買ひ取るといふところから、資本主義的・家内労働までの形態がある。資本主義的家内労働とは、買占人が小工業者に原料を配給して、一定の賃銀で自宅で加工させる關係を指すもので、ここでは買占人の商業資本は産業資本に移行し、直接的生産者がこの小工業の經營者であらうと、彼に雇はれる賃銀労働者であらうと、直接的生産者は何れにしても事實上の賃銀労働者である。

小工業はその小規模經營の故に決してツンフト的手工業に對して決定的に優位を占めることは出來ない。ところが相當數の労働者を擁する作業場で分業が行はれ出すと共に、單純協業に基く小工業は終りを告げ、マニユファクチュアが發生する。他方では、買占人が今迄直接的生産者にやらせてゐた作業の中の一部を自分の作業場で賃銀労働者



にやらせ、それに関聯して分業に基く協業が起るときにも、マニユファクチュア（勿論、資本主義的マニユファクチュア。——マニユファクチュアとは分業に基く協業だから、資本主義固有のものでなく、大生産が行はれた奴隷經濟においても不完全ではあるが存在した。しかしそれが普遍的現象となつたのは資本主義勃興期である。そこで、本書では資本主義的マニユファクチュアのことをマニユファクチュアとした）は發生する。マニユファクチュアは手工業的な技術を基礎としてゐるとはいへ、社會的生產に向つての大きな前進である。それは小工業の如く商人資本に全く隸屬するのではなく、産業資本を生長させる。

「商業資本と産業資本の最も緊密な結合はマニユファクチュアの最も特徴的な特質の一つである」（註）。マニユファクチュアにおいて産業資本が商業資本と密接に結びつくといふことは、マニユファクチュアがその手工業的な技術的基礎をもつてしては未だ一般に手工業や特に小工業・小商品生産を驅逐し得ない關係上、後者は商業資本を通して前者に従屬せしめられ、前者、即ちマニユファクチュアにおける生産過程に——典型的にはその「外業部」として——結びつけられるといふことである。マニユファクチュアの「廣大なる基礎」（マルクス）を成してゐる「都市手工業と農村家内工業」が驅逐され、資本主義的大生産が壓倒的となるためには、機械をもつてする工場の出現が必要であり、マニユファクチュアから工場へのこの推移が産業革命と呼ばれるところのものであることはすでに説明する迄もないだらう。

（註）「ロシアにおける資本主義の發展」第六章第六節

マニユファクチュアから大工業への移行の社會的條件としての労働者の「我儘」と資本家相互の自由競争とについては先きにも説明した。ここで尙ほその經濟的條件として市場の擴大を指摘する必要がある。マニユファクチュアは



大市場の存在を前提とし、且つ益々市場を開拓し、國內市場から世界市場へと進むものであるが、やがてマニユファクチュアは自分の創出した世界市場の需要を満たし切れなくなり、大工業に移らなければならなかつた。そしてこの移行の技術上の條件としては、すでにマニユファクチュアの發展と共に、労働器具、機械の生産がそこで開始されたといふことが擧げられる。

小商品生産からマニユファクチュアへ、マニユファクチュアから大工業へのこのやうな發展は資本の原始的蓄積を背景とするものである。原始的蓄積とは、一方の極に資本および資本たり得べき生産手段を集中せしめ、他の極に資本なき、生産手段なき、従つて自己の労働力を賣る以外に生計の途なき、「自由な」労働者を大量的に造り出し、以つて資本主義的生産に必要な條件を創出することである。従つて資本の原始的蓄積において最も重要なのは、土地からの農民の分離である。土地から離れた農民は労働市場にあらはれ、農民から分離した土地には資本主義的農業經營の可能性が造り出される。そこで、單に工業労働者が多量に發生するのみでなく、農村における農業上の賃銀労働者も發生し、農村における自然經濟的要素の解體によつて國內市場が廣汎に開拓されるといふ結果になる。マルクスはイギリスにおける共同地の「圍ひ込み」の例によつてこの過程を説明し、土地からの農民の分離が資本の原始的蓄積においては基本的な契機であることを示した。この分離が充分に行はれない所では、農業の資本主義化は充分に進行せず、國內市場は狹隘ならざるを得ない。

マルクスはなほ原始的蓄積の種々の契機として殖民制度、國債、高率租税、保護貿易、貿易戦等をあげ、これらのものが「本來のマニユファクチュア時代の産物」であり、「大工業の幼少期」に巨大に發展したことを指摘する。と



ところで原始的蓄積において舊來の生産關係は變化せしめられ、資本主義的生產關係が創造されるのだから、それは決して經濟の自生的運動たるにとどまるものではなく、ゲヴァルトの發動なくしては濟まされない。「原始的蓄積の種々の契機は、今や多かれ少なかれ時間的順序をもつて、特にスペイン、ポルトガル、オランダ、フランスおよびイギリスに分配される。イギリスにおいてはこれらの契機は十七世紀末に殖民制度、國債制度、近代の租稅制度および保護制度の中に體系的に結合せしめられる。これらの方法は一部分は最もブルータルな強力<sup>ゲヴァルト</sup>、例へば殖民制度に依據してゐる。だからそれらすべてのものは、封建的生產様式の資本主義的生產様式への轉化過程を溫室的に助長し、推移を短縮するために、國家權力を、社會の集積され組織された強力を、利用するものである。強力は新たなる社會を孕めるすべての舊社會に對する助産婦である。それは自身一つの經濟的力である。」——とマルクスは書いてゐる(註)。

原始的蓄積の過程において、その障害となる封建的生產關係およびそれに依據する政治體制は………に………される。それがブルジョア變革である。

(註) 「資本論」第一卷第二十四章

日本において、明治政府の手で行はれた原始的蓄積にとつては、土地からの農民の分離が殆どなされず、租稅および國債が重要な役割を演じたといふ點が特徴的である。就中ここで最も重要な意義を持つた地租は、土地への農民の事實上の緊縛を前提とさへするものであつた。純然たる封建的の經濟外強制の代りに、半農奴的農民の生計補充のための副業(特に養蠶)およびこの生計補充のための賃銀勞動(農民家族員の出稼ぎ)に依據する工業部門(就中、機業、製絲、紡績)がかかる緊縛を事實上可能ならしめ、公力・經濟外強制によつて保證される封建的高率地代の收得



を可能ならしめた。他面において、工業における労働賃銀は、それが半農奴的農家家計の補充用であることにより、また農村からその低い半農奴的生活水準を身につけて流入して来る労働者に支拂はれるものであるといふことによつて、著しく低いものにされる。一言でいへば、ここでは「賃銀の補充に依つて高き小作料が可能にせられ又逆に補充の意味で賃銀が低められる様な關係」(山田盛太郎氏の表現)が成立する。日本の獨占資本主義は、その封建的純粹性を失ひつつも、而かもなほ強固に残存せしめられてゐる、かかる半封建的農業關係を自己の存立の不可欠な契機として包含し、その基礎の上に立つてゐるものである。このことによつてその國內市場の狹隘さが制約され、ここからして外部へのエクспанジョンの必至性が、即ちわが國の資本主義の特にアグレッシヴな性質が歸結される。

この問題に關聯して、農業における資本主義の發展に關する若干の問題に一瞥を與へる必要がある。細分された土地への緊縛からの農民の解放は、單に解放された農民の一部の農業労働者への轉化の可能性を與へるのみでなく、封建的關係の廢棄によつて農業の資本主義化の途を開拓する。このやうな「解放」はイギリスにおいては地主自身の手で遂行された。そこでは地主は共同地を收奪し、自己の土地から農民を文字通り掃蕩した。それは羊毛マニユファクチュアの繁榮に促されて、耕地を羊牧場に轉化する必要から生じたものであつた。だが封建的土地所有およびそれに基づく農民からの農奴制的な收取は、地主がこれに依據してゐる限りでは、農民の運動によつて初めて徹底的に打破される。これはアメリカ的な行き方であつて、ここでは地主的大土地所有は分解して小ブルジョア的所有が生れ、資本主義的農業の廣汎な生長のための地盤となる。イギリスの場合の如く土地利用方法の特殊な變化によつて制約されない限り、封建的土地所有關係の徹底的な解決にはただアメリカ的な途があるのみである。



これに反し、地主自身が農民の封建的隷屬を利用して、自己の土地において商品生産を行ひ、徐々に資本主義的經營に移行してゆく場合がある。プロシヤのユンカー經營がその典型である。しかしかかるプロシヤ的な行き方は單に農民にとつて重壓であるといふ意味においてのみでなく、また發展テムポの緩漫さ、封建的關係の清掃の不徹底さといふ意味においても、農業の資本主義化のための充分な途ではない。

さて、日本における農業の資本主義化は、アメリカ的な途でも、プロシヤ的な途でも、未だ決して解決されてゐない。だが日本農業が、全體として考察される場合、プロシヤ的な途を進み得ないものであることは、日本資本主義そのものが半封建的農業を自己の存立の不可欠な條件としてゐるといふ事情によつて決定されてゐる。かかる存立條件としての封建的高率地代の残存は、地主のためには勿論その固執を不可避的ならしめ、小作農および地租を納める自作農のためには賃銀労働や生産手段（土地以外の）に投資する餘地を與へない。マルクスは、封建的土地所有の分解の跡に生じた零細土地所有の下においても、土地私有のために、土地購買により多く資本が投じられるのに比例して生産部面への小農民の投資がより少なくされ、それだけ農業の資本主義化が阻止されることを指摘してゐる。「土地購買のためになされる貨幣資本の支出は、何ら農業資本の投下を意味しない」のである（註一）。況んや、封建的高率地代が維持されてゐる地主の所有地に、資本主義的經營が普遍的に發生し得ないことは當然である。土地が動産化されて自由に賣買されるとか、小作が「自由意志」による契約の形式を取るとか、農業において商品生産（單純商品生産）が行はれるとかいふことは、その國の經濟の全體においては資本主義的生產が優位であり、農業がこの資本主義的生產によつて影響されるといふことは意味しても、未だ決して農業そのものの資本主義化を意味しない。「農業に



おける資本主義の主要な徴表たり指標たるものは賃銀労働である」(註二)、即ち資本主義的商品生産である。

(註一) 「資本論」第三卷第四十七章

(註二) レーニン「北米合衆國における資本主義と農業」第十六章

以上で明かなやうに、資本主義的社會構成には極めて屢々——後進國において——舊社會の生産關係が從屬的にウクライドとして残存する。そしてこのウクライドは、國によつて廣さと深さを異にするものであるが、全人口中の顯著な部分がかかるウクライドの桎梏の下にあるときには、その清算はもはや序でになされるものではなく、またそれは自然に消滅するものでもない。

資本主義はかやうに農業部面においては往々にして一定の制限にぶつかるとはいへ、資本主義的社會構成は從來の歴史において最も飛躍的に生産力を發展せしめたものである。そして生産力のかかる驚くべき發展は資本主義的生產關係によつて促進された。だが、資本主義的生產關係は今や生産力の一層の發展の桎梏となつてゐることはすでに述べた通りである。資本主義的所有關係は社會的生產の一層の發展を阻害し、兩者間のこのコンフリクトの故に獨占資本の支配下においても生産のアナーキーは排除されないのみか、資本主義的生產様式にとつて益々脅威的となるクリーゼとなつてあらはれ、それはただ生産力の驚くべき浪費(クリーグ、生産縮少)、勤勞者の生活條件の未曾有の惡化によつてのみ維持される。併しながら資本主義はこの勤勞者階級の生長をもたらすことによつて、同時に自身の矛盾の解決者を産出するのである。

資本主義が人類史上極めて進歩的な意義を持つてゐるのは、それが人類史の「自由の王國」への飛躍の物質的前提



を生産力の目ざましい發展によつて造出し、かくして歴史上最後のアンタゴニスティッシュな構成となるといふ理由からである。

**ソヴェート社會**

ソヴェート聯邦が資本主義と異つた型の經濟體制、異つた社會經濟的構成を示してゐることは何人にとつても疑ひはない。ここではただソヴェート社會の存立條件の一端とその發展段階について一言するに止める。

この社會の一大特質は、それを形成する生産關係が資本主義體制の中に自生的にウクラードとして決して發生しないといふことである。この點でそれは、奴隸制が原始社會に、封建制が奴隸制社會に、資本主義が封建社會に、ウクラードとして自生的に形成されるのと根本的に相異なる。資本主義は生産力の發展によつてソヴェート社會の生誕の物質的前提を創出したにとどまり、ソヴェートの生産關係を自身の中に生成せしめはしなかつた。そこで、資本主義の發展に當つては、初め、資本主義的生產關係が封建社會の胎内に發芽し、生長し、最後に、ブルジョア政權の樹立によつてかかる生産關係の確立が一應完成されるのに反して、ソヴェート社會の場合には、ソヴェート國家の創立が新しい生産關係の創出過程の端緒となつたといふ點に、兩者間の原則的な差異がある。この差異はスターリンが強調してゐるところである。

ソヴェート國家の創始が新しい型の生産關係の創出過程の開始を意味するものに外ならぬとするならば、ソヴェート聯邦が何らかの完成的な社會經濟的構成を代表せず、かかる構成の完成に向ふ過渡期にあるものだといふことは明らかである。この過渡期において、新しい生産關係の造出の上に決定的な役割を演じるものはその國家であり、國家を



牛耳るクラッセであり、独自の政治形態である、といふことを忘れるものは客觀主義者である。  
ところで、かかる過渡期は更に次のやうに細分される。

(1) 「十月」とその直接の繼續（一九一七年十一月から一九一八年十一月まで）

(2) Bürgerkrieg と戦時コンミュニズム（一九一八年十一月から一九二一年三月まで）

(3) 新經濟政策の基礎における國民經濟の復興と聯邦組織の創立（一九二一年三月から一九二五年四月まで）

(4) 國民經濟の復興の完成とソシアリスティックな再建への移行（一九二五年四月から一九二八年十月まで）

(5) ソシヤリズムへのソ聯邦の進入とソシヤリズム經濟の土臺の建設（一九二八年十月から一九三三年一月まで——第一次五ヶ年計畫）

(6) ソヴェート聯邦におけるクラスなきソシヤリズム社會の建設（一九三三年一月に始まる第二次五ヶ年計畫）

これらの各々の段階にもまた多くの小段階があるのだが、それについては、また右にあげた各段階の特質については、説明を省略して、ただ次のことを指示して置かう。即ち、このやうにして造り出されつつある生産關係は、資本主義の下でその生産關係と兩立しなくなつた發展した社會的生產に照應するもので、そこではアンタゴニズムは存在せず、生産のアンキーは止揚される。そして生産關係と生産力の間矛盾が依然として生産力の發展の推動力であるとはいへ、この矛盾は、生産手段と労働者との間のアンタゴニズムが缺除し、前者が後者のために利用されるといふやうな生産關係の故に、益々増大する大衆の消費によつて擴張再生産が促進される、といふ點に表現される。

舊ロシアにおいて半封建的な關係の下にあつた農業の發展は特別興味あるものである。それはブルジョア民主主義



の徹底による無数の獨立農民の創始をもつて開始される。だがこの農民・小經營者が農業ブルジョアに生長せず、ソシャリズムの途へ進むためには、彼等（中農・貧農）をプロレタリアートの指導の下に協同化（コルホズ化）し、階級としてのクラーク（資本主義的要素）……が必要であつた。コルホズは、先づその「マニユファクチュア」的時代、即ち舊來の後れた技術的基礎上での協業の時代から、機械化の時代に入つてその客觀的基礎が完成される。この意味で機械・トラクター配給所網の創設はソヴェート農業再建において極度に重要な意義を有する。

最後に、資本主義諸國に對して謂はば異分子的なソヴェート同盟が何故單獨に存續することが出来るか、何故に資本主義諸國は……出得ないか、といふ問題に觸れる必要がある。この問題は現代帝國主義諸國の國際關係の緊張の問題と不可分に結びついてゐるもので、一般的には、帝國主義時代、就中その現段階において特に顯著に作用する資本主義發展の絶對的法則たる、資本主義の發展の不均等性の法則によつて説明される。

資本主義の不均等的發展の法則のお蔭で、國內的には種々の企業間において資本主義的發展の程度やテムポは不均等で、つねにその均り合ひが變動するために、國民經濟の「組織化」、計畫化は獨占が如何に發展しても不可能であり、また國際的にこれを見れば、資本主義は各國において同時に發展するのではなく、先進國と後進國が競争し、且つ各國の發展テムポにはそれ／＼相異がある。一つの國においては資本主義は急激な上昇的發展から緩慢な發展テムポ又は下向的發展に移つてゐるとき、他の國においては急激な昂揚・膨脹又は依然たる上昇的發展が行はれるといふこと、例へばドイツにおいては産業革命が未だ完成しなかつた十九世紀の第三四半期にイギリスにおいては早くも「帝國主義の最も重要な二つの特徴——大きな殖民地領有と世界市場における獨占的地位」（註一）があらはれたとか、西



ヨーロッパの資本主義が下向的發展に向つたときに日本資本主義は上向的に發展してゐたことは、すべて資本主義の發展の不均等性を示すものである。かかる不均等性の故に資本主義諸國の勢力の均り合ひは斷えず變動し、新興資本主義國は自己の増大した勢力に照應する新たな領土を要求する。この要求は、地球上に未だ先進資本主義國によつて獨占されてゐない土地が残つてゐた間は、資本主義諸國間の激しい軋礫なしに充たされた。ところが帝國主義の時代に入ると共に事情は變つてくる。「帝國主義とは、獨占と金融資本との支配が成立し、資本輸出が顯著な意義をもち、國際的トラストによる世界の分割が始まり、且つ最大の資本主義諸國の間における地球の全領土の分割が完了してゐる、といふやうな發展段階における資本主義である」(註二)。かやうにこの時代には領土や勢力範圍の分割が完了してゐるのだから、資本主義諸國間の勢力上のバランスの變動は、必然的に領土の再分割を一つの定言命令として口授する。過ぐるヨーロッパ戦争はかやうにして勃發した。現在において如何にドイツやイタリーの帝國主義が領土獲得の衝動に驅られてゐるか、それに對してイギリスやフランスが如何に自己の既得權の維持に汲々としてゐるか、等々の事實はいづれも、資本主義の不均等的發展の法則が帝國主義、特にその一般的クリーゼの時代に如何に鋭くあらはれ、如何に領土再分割の問題をめぐつて列強間の關係を緊張せしめるかを明白に語つてゐる。

(註一) レーニン「帝國主義」第八章

(註二) 同上第七章

帝國主義列強間の益々深まるこのやうな矛盾の故に、一方では、この………において解決しようとする動向が力強くあらはれる(例へばソ聯邦のウクライナを占據してドイツとポーランド間の領土再分割にか



らまる紛争を解決しようとするヒトラー黨の綱領)と同時に、同じ理由によつて、他方では、帝國主義諸國間および諸國のブロック間の協力、團結は益々困難となるばかりか、コンフリクトの傾向が益々顯著となる。こゝにいふ事情のためにソヴェート聯邦は資本主義的環境に圍繞され乍らも、よく自己を存續・發展せしめることが出来るのである。その際、ソヴェート聯邦の國際的地位を安全ならしめる上に演ずる外交の役割は重要である。



## 第八章 階級と國家

### 第一節 唯物史觀と階級理論

人類史の一定の發展段階において生産關係が階級關係の形式をとることについてはすでに説明した。氏族制社會の崩壞以來、實に人類社會は階級的分化に立脚し、一つの社會經濟的構成から他のそれへの推移は階級關係の根本的な變動を意味した。ここでは生産力と生産關係の間の矛盾は階級間の矛盾となつてあらはれ、且つ後者を通して展開される。従つて資本主義の生産力と生産關係の矛盾が極度に緊張してゐる現在では、階級の存在を否定することは如何なるブルジョア學者でも能くしないところである。問題はただ、階級の意義、本質を如何に把握するかにある。

すでにマルクス以前のブルジョア學者も社會における階級および *Klassenkampf* の存在を確認した。だが彼等は、フランスの王政復古期の歴史家や古典派經濟學者の例で明白なやうに、封建社會と異つてブルジョア社會の階級關係は自然的な秩序であり、それ故それは不變的に存續せねばならぬ、といふ見地に立つてゐた。従つて彼等はブルジョアジーに對するプロレタリアートの不從順を罪惡と見た。

この方面におけるマルクスの功績は、階級の存在を歴史的に、經過的な現象として辯證法的に把握し、階級的アンタゴニズムそのものは——従つてもちろん如何なる階級的社會構成も——歴史的に生滅するものであつて、決して自然



的な秩序として永久に存在理由を持つものではないといふことを明白にした點にある。彼は資本主義社會の經濟的構造の嚴密に科學的な分析に依據して、資本主義的構成が階級的アンタゴニズムの最後の歴史的形態であることを解明した。そして彼は、アンタゴニズムのこの最後の歴史的形態の……の過程は如何にして、如何なる形式の下で行はれるかを吟味し、この過程におけるプロレタリアートの……したことによつて、一切のブルジョア學者の御用學的な階級理論から決定的に異なる科學的理論を建設した。マルクス主義の階級理論の特徴は、ワイデマイヤーへのマルクスの有名な手紙において簡潔に、適確に表現されてゐる。

「私に關していへば、近代社會における諸階級の發見の功績も、その相互の抗争の發見の功績も私のものではない。ブルジョア歴史家達は私よりずっと以前にこの抗争の歴史的發展を叙述し、ブルジョア經濟學者達は諸階級の經濟的解剖を叙述した。

私が新たに爲したことは次のことの證明にあつた。即ち、(1)階級の存在はただ生産の發展に固有な一定の歴史的な闘争形態とのみ結びついてゐること、(2) Klassenkampf は不可避免的に Proletariat の……に導くといふこと、(3) この……そのものはただ……への分化の餘地のないやうな社會秩序……への過渡を成すものにすぎぬといふこと、の證明にあつた。」(ロシア譯によつて引用)。

これらの言葉によつて、資本主義社會の諸階級に關する理論的處理におけるブルジョア學者とマルクスの相異、後者の特質は明白に理解される。そしてマルクスがここに語つた階級理論の眞實性は、今日の歴史そのものによつて實證されつつあるのである。



階級關係を捨象して社會過程を觀察するストルーヴェの自由主義的な抽象的客觀主義、Klassenkampf における政治の意義を無視する經濟主義、プロレタリアートの階級運動をブルジョア自由主義の精神で稀釋し、それをブルジョアジーにとつて安全な範圍内に切縮めるメンシェヴィズム、カウツキー主義等々に對するレーニンの論争は、マルクスの階級理論の本質の解明、その一層の具體化、發展において最も注目すべき寄與をなしてゐるものである。

周知の如く、プロレタリアートの階級運動には三つの形態がある。經濟的、政治的およびイデオロギー的の形態が即ちこれである。だがこの三つの形態は單に並立的なものでなく、正に政治的の運動形態において、しかも社會の政治的上層建築の Umwälzung に向けられるやうな形態において、最も積極的な形態を探り、集中的に表現されるといふことも、唯物史觀における重要な主張である。そしてこの主張はあらゆる歴史的事實によつて裏書きされてゐる。

レーニンはかかる主張の見地から、Klassenkampf の自由主義的概念を批判した。あらゆる Klassenkampf は政治的 Kampf であるといふマルクスの有名な命題から、日常の經濟的要求のための原始的抗争がすでに政治的 Kampf であるといふ結論を導き出し、本來の政治運動を否定した經濟主義者の自由主義的見解や、政治の領域における運動を認めても、この領域に Staatsgewalt を入れなうで、單に部分的改良のための運動のみを入れる自由主義は、彼の最も鋭い批判の對象であつた。「經濟主義者は、Klassenkampf の中で、ただ自由主義ブルジョアジーの見地からみて最も我慢出来るもののみを認めて、自由主義者以上に進むことを拒絶し、より高い、自由主義者にとつて受容出来ない Klassenkampf を認めることを拒絶した。經濟主義者はこれによつて自由主義的勞働政策家に轉化した。……自由主義は政治の領域においても Klassenkampf を認めようとする。だがそれはこの領域に Staatsgewalt の構成が這入らな



いといふ一つの條件付きである」(註)。彼はまた、その名著において、Klassenkampfの存在を認める點ではマルクス主義者もブルジョアも變りはないことを指摘し、「ただ Klassenkampfの承認を Proletariatの・・・の承認にまで擴張する者のみがマルクス主義者である」と断定し、かかる擴張に反對するカウツキー主義やメンシェヴィズムの自由主義的本質を痛烈に摘撥した。

(註) 「階級闘争の自由主義的概念とマルクス主義的概念」

マルクスの階級理論——レーニンによつて一層展開された階級理論——は、資本主義的構成の・・・の過程の合法性、特にいはゆる過渡期の合法性の理解にとつて決定的に重要なものである。従つてこのやうな理論にまで到達しない「唯物史觀」は、現代において經驗されつつある歴史過程の合法性の理解に全く役立たない。そればかりでなく、かかる自由主義的な「唯物史觀」は、理論的基礎において、經濟的唯物論、經濟の自生的運動への拜跪や、客觀主義に通じるものである。辯證法的唯物論がプラクシスの意義を正しく評價したことによつて舊唯物論の觀照的性質を除去したと云ふとき、そのプラクシスにおいて正に世界を變化せしめる Klassenkampfが肝要なものであることに留意しなければならない。客觀主義や觀照的唯物論に對する批判はかかる階級理論なしには不徹底たるを免れない。社會過程における人間の能動性の意義の正しい評價はここまで具體的に展開されて、初めて、客觀主義や觀照的見地の弱點を除去し得るのである。

以上の極めて不十分な説明によるも、唯物史觀における階級理論は單に實際上のみならずまた理論上でも非常に重大な地位に在るものであるといふこと、それは單にマルクスの科學的ソシヤリズムに關聯して決定的に重要であるの



みでなく、また辯證法的小よび史的唯物論の理論的内容の展開において不可缺な契機を成してゐるといふこと、が一應は明白になつたであらう。そこで今度は、簡単にではあるが、階級に關する唯物史觀的規定を明白ならしめるために先づ階級の發生とその歴史的變遷に立入らう。

## 第二節 歴史的範疇としての階級

### 階級の發生

階級の存在は人類史の一定の發展段階、生産力の一定の發展水準に結びついてゐる現象であるから、それは決して人類そのものと共に古いものではない。生産力の一定の發展段階において初めて階級が發生したといふことは單に臆測でなく、實證的研究によつて論證された事實である。

周知の如く、エンゲルスは階級關係の發生の二通りの経路について語つてゐる。次に彼の「反デューリング論」(第二篇第四章)から、これに關する彼の言葉を引用しよう。

「人間は本來、動物界——狭い意味での——から出てくるや否や歴史に足を踏み入れる。だがいまだ半ば動物であり、粗野であり、いまだ自然力に對して無力であり、いまだ自分自身の力について無知である。だから動物と同様に貧しく、動物と殆ど同様に不生産的である。生活状態の一定の平等が支配し、家族の長達にとつてもまた社會的地位の一種の平等が支配する——少なくとも社會階級の缺如が支配し、かかる缺如は後期の文化民族の自然生的な農業共同體においてもなほ存続するものである。かかるいづれの共同體においても、最初から、たとへ全體の監視の下にお



いてであるにせよ、その保護を個々人に委せねばならぬところの共同の利害が存立する。紛争の解決、個々人の越權行爲の制壓、特に暑い地方における河海沼湖の管理、最後に、宗教上の機能がそれである。かかる機能はあらゆる時代の原生的共同體において、例へば最古のドイツのマルク共產體において、亦今日なほインドにおいて見出される。これらの機能は、もちろん一定の………られてゐるもので、………である。漸次に生産力が上昇する。より稠密な人口は、個々の共同體の間に、ここでは共同な利害、かしこでは對立的な利害を造り出し、より大なる全體へのこれらの共同體の成群は更に新しい分業を喚起し、共同の利害を保護し、對立的な利害を防止するため機關の創造を喚起する。すでに群全體の共同の利害の代表者として、各個々の共同體に對しては特殊な、場合によつては對立的でさへある地位を占めるところの………、やがて一部分は、すべてが自然生的に經過する世界において、殆ど當然に現はれてくる………によつて、また一部分は、他の群との衝突の増加につれて増大する必要によつて、より一層獨立的なものとなる。このやうにして最初社會の………であつたものが、社會に對して相對的に獨立的な、そして遂に對立的な要素に轉化する。多くの近親氏族（又は、より典型的には、多くの娘氏族を統一する母氏族たる大氏族）から成立する種族の軍師や、諸種族の地域的統一としての民族の長の如きがそれである。社會の一定の機關の社會からの獨立、階級分化が進行すると共に、原始社會は終りを告げる。

「だがかかる階級形成と並んで、なほもう一つの階級形成が行はれる。農耕する家族内部の自然生的分業は、繁榮の一定の段階において、一人又はもつと多くの他人の勞働力の導入を可能ならしめた。舊來の土地共有が既に崩壊したか又は少なくとも舊來の共同農耕がそれぞれの家族による分割地の個別的耕作に席を譲つた地方では、特にさうで



あつた。生産は、人間労働力が今や單なる自分の生計に必要な以上のものを生産し得るまでに發展した。より多くの労働力を扶養する手段が存在するに至つた。これらの労働力を働かせる手段もまた存在するに至つた。労働力は一つの價値を獲得した。だが自身の共同體やそれが所屬せる團體は、働かせうる餘分な労働力を提供しなかつた。これに反して戦争がこれを提供した、ところで戦争は多數の共同體群の同時的並存と同様に古いものであつた。今まではひとは戦争の捕虜をどうしてよいか知らなかつた、そこで、捕虜は單に撲殺されたり、もつと初期には喰はれてしまつた。ところが現在到達された『經濟狀態』の段階ではそれは一つの價値を取得した。そこでひとは捕虜を生かして置いてその労働を自分に役立たせた。かくて強力は、經濟狀態を支配するどころか、却つて經濟狀態への奉仕を強要された。奴隸制が發明された。ここでは、戦争が奴隸制を造り出したのではなく、奴隸制を可能ならしめ、且つ必然的ならしめる迄に發展した生産が捕虜の奴隸への轉化を制約したのだといふことを銘記しなければならぬ。ゲヴァルトは決してそれ自身から新しい生産關係を造り出すものではない。それはただ新しい生産關係の可能性が現存してゐるときに、その實現を媒介する契機となり、新しい社會秩序の生誕の助産婦となるにすぎない。奴隸の發生は生産そのものの發展の結果であり、餘剰労働が不可能なやうな生産の低度なる段階においては戦争の捕虜は決して奴隸として利用され得なかつた。そして共同體内部の貧富の差の増大や高利貸業の發生につれて債務奴隸が發生した。

最初の階級社會は奴隸所有に基くものであるから、そこでは基本的なアンタゴニズムは奴隸とその所有者の間のそれである。だから社會的職能の遂行機關が全社會から獨立化するにつれて生ずる階級分化は元來、奴隸制とは別箇なものではなく、前者は後者を基礎として成立するものである。古代社會においては貴族乃至富者は最大の奴隸所有者